
真剣でこの世界にやってきた

かもし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣でこの世界にやってきた

【Nコード】

N6474Z

【作者名】

かもし

【あらすじ】

主人公【明】はいじめを受けて中学2年から3年のクリスマスまでひきこもっていたが、とうとう明は親にも追い出され自分の行き場を失う・・・そして明はとうとう飛び降り自殺を決意した・・・のはずんだけどなぜか自分が目を覚めたときには【真剣で私に恋しなさい】とまったくおんなじ世界にきていた・・・そこで彼は一人の男性にあった・・・その名は雅、そして雅をこういう「今日から俺はお前の父さんだ、よろしくな」

そう・・・すべてはここからだった

初めて投稿するんで

よくわからない文章や誤字、脱字があると思いますが・・・
よろしく願います！！

真剣で考えなさい！！（前書き）

自分は初めて小説投稿しますのでこれからオナシャス！！

真剣で私に恋しなさい！！の派生小説です。

一応更新はまあまあだと思っています！

それではよろしく願います！！

真剣で考えなさい！！

僕の名前は「後藤 明」

僕「真剣で私に恋しなさい」というアニメを見ながら部屋の中1人こもっていた

「はぁ・・・俺もこの世界にいききたいなぁ・・・2次元いいなぁ・・・」
僕はそう思いながら日々のひきこもりになっていった原因はいじめ・

僕はデブで女子からも男子からも嫌われているそのおかげで中2から中3の今までひきこもっているのだ。

そして僕のこの現実逃避生活にも終止符が打たれるときがやってくるその日はクリスマスだった、僕はいつものようにPCをつけゲームしたり掲示板みたりしていた

誰かが俺の部屋の近くまでやってきた俺はどうせトイレだろうと思つてPCをしていたら親父が入って来た

「おい、お前は今日でさよならだ、今日の6時に施設にいれるからな」

そう・・・とうとうこの日がやってきたのだ・・・

僕はもうこれでこの世からはおしまいなんだなと思った・・・

僕は気が付いたら家から出て走っていた親父の声がだんだん遠くなくなっていく・・・

僕はなぜか学校にきていた、そう僕はここで人生を終わらせようとおもった

ああ・・・もし死んだら「真剣で私に恋しなさいの世界にいききたいなぁ・・・」

僕はそう思いながら飛び降りた・・・顔にはいろんなものがでていた、涙、鼻水、よだれ

今の僕は最高に汚かった・・・さよなら・・・家族・・・

ドン

僕は目が覚めていた・・・ここは天国なのか・・・にしてもどこかで見たような風景だなー・・・あん？そういえばここ・・・いや、ここは違う、天国だ・・・

俺はどうやら河原で寝ていたらしい

???「よお、やっと気が付いたかもうあんなことはするんじゃないぞ」

俺「おい！！誰だよここはどこだ！！」

???「お前が望んだ場所だ」

俺「は・・・？と、いうことは・・・」

???「そう、お前は明日から川神学園ですごすことになる。いいか？そして俺がお前の親ともなる雅だ、よろしくな」

そういつて雅は・・・じゃなくて雅さんは俺に握手を求めてきた

雅さんは髪が長くスラっとしていた絶対こいつ持てるだろ・・・リア

ア充が・・・

そんなことは置いといて僕はまだ今の現状がわかっていなかった・・・

あ・・・そういえば死ぬ前に叫んでいたな・・・俺は思っていたことを叫んで飛び降りたのか・・・

と、いうことはああああああああああああああああああああ！！

やったああああああああああああああああああああああああああああああ！！

僕のテンションは爆発しそうなくらいだった

そのテンションに雅はフツツと笑ってこういった

雅「そのお前のテンションはどこまで続くかな・・・」

俺「どういう事ですか？」

雅「お前の今の精神力と力のなさど体系と顔をよく見てみる」

俺「ぐっ…（絶望）」

俺は・・・2次元でもひきこもりになるのかな・・・いや、ならない！！絶対だ！！

これは神が与えたチャンスだ！！絶対ものにしてやる！！絶対にな！！

俺「僕は負けませんよ、神が与えた最高のチャンスもたらすわけにはいかないでしょう」

雅「そうか、まあ困ったときは俺になんでも相談しろ一応俺は明の父親だからな」

俺「雅さんあなたはなにものなんですか・・・！？」

雅「その説明はあとだ・・・そうだ！！お前は川神院にするか？それとも島津寮どっちがいい？」

俺「うーむ・・・川神院はいろいろと死にそうだから俺は島津寮でいいや」

雅「まったくお前は・・・ハーレムなんて期待しても無駄だぞ？」

俺「俺はあんな武道だらけの生活は嫌だ！！しかもあそこ温泉あるだろ」

雅「まあ、いいだろう」

俺「雅さんはどうするんですか？」

雅「俺も少しはそこにいてやれるが俺は四天王だ、いろいろと忙しいから毎日はお前の面倒みてやれんと思う、それでもいいな？」

俺「はいわかりました。って四天王？なにそれ？」

雅「だあああああああ！！今のは聞かないことにしてくれ」

俺「…わかりました」

こうして俺の新しい生活が始まるのだった

真剣で課題をクリアしなさい（前書き）

雅がくりだした課題とは・・・

真剣で課題をクリアしなさい

雅「ほら、ここが島津寮だ、まあ連絡はいれておいてやったから後はお前に頼んだぞ」

俺「ちよつとまって雅さんまだ聞きたいことはやまほどあるのにイイ――」

雅「俺は9時には戻るからそれまでゆつくりしといてくれや」

俺「わ、わかった・・・」

いや、いくら二次元とはいえども・・・やっぱ1年半ひきこもってたせいかとても人と会話するのは怖い・・・

おばちゃん「あんたが、明君ね今日は寒いから早くいらっしやい！」

あ、あれは麗子さんか・・・やっぱアニメで見たのとそっくりだなあ・・・

俺「あ、はい（挙動不審）」

麗子「さ、あんたは1回の一番奥の部屋だから」

俺「わかりました」

麗子「それと1階は男子の部屋2階は女子の部屋と分けられているからそこも気おつけてねもし、男子が2階にあげれば・・・その時は・・・まあ、お風呂は1階にあるから」

俺「わかりました、今後ともよろしく願います」

そういつて俺は頭を下げた

麗子「うん、偉い子だね今日はサービスに夜ご飯は卵焼き付けとくわ」

俺「ありがとうございます」

麗子「それじゃあ私は晩御飯の支度でもいつてくるね、なにかまたわからないことがあれば行ってちょーだい」

俺「はい、そのときはお世話になります」

なんとか麗子さんとの挨拶も終えて自分の部屋に戻って行ったところ

るだったにしても島津寮ってこんなに騒がしかったんだな
俺「さーってと、ここが新しい部屋かー ん？なんだこれ」

そこに【明へのプレゼントだ 雅】

と書かれた封筒とともにでかい箱があった封筒の中には手紙がはい
っていたよんでみると

メリークリスマスー！！

君にはとっておきのクリスマスプレゼントを用意したよ
といっても私生活類だけどね

携帯と洋服と生活用品を置いたよ

まあ、今日はゆっくり休んでくれたまへ

雅より

そう手紙には書いてあったのだ

俺「携帯だー！！」

どんだけ優しいんだ雅さんはー！！

俺「スマホか？アイホンか？ジョ○スか？uuか？KJJJIか？」

中身を見ると I p o n だった

俺「ジョ○スきたー！！！！！！機種はなんだ？」

KJJJI

俺「KJJJIきたー！！！！！！uuキター！！！！」

俺のテンションはまたしても爆発してしまった

麗子「みんなーごはんだよー」

そういつて俺はアイポンを後にご飯にした

俺が食卓についたら

源さんと京と大和とキャップがいた、うむやっぱアニメと一緒にだな

麗子「今日からこの寮に住む明君、皆仲良くしなさいよ」

俺「皆よろしく!!」

そういつて俺は元気よく挨拶した

キャップ「おう、俺は風間翔一、キャップと呼んでくれよろしくな
!」

大和「俺は直江大和だよろしく」

源さん「俺は源 忠勝だよろしく」

京「・・・」

大和「こいつは京、ちょっと根暗だが根はいいやつなんだ」

うむ・・・やっぱアニメと同じだな俺はそう思いながら飯にした
キャップ「明はどこからきたんだ？」

この時なんていえばいいんだろうか・・・異次元転送とかいったら
完璧変人扱いされるし・・・

そうだ地元をいおう!

俺「俺は福岡からきたよ、ちょっと親の都合でこっちにくるはめに
なっただがな」

キャップ「その親は？」

俺「ん? 知らね」

俺は適当に嘘をつきながらいろんなことを皆と話していた
よかった・・・なんとか俺は会話くらいはできるみたいだ

しかしこの体系どうにかしないとなあ・・・太りすぎて1カ月もた
たないうちに女子から嫌われてしまう・・・そういえば雅さんは四
天王とかいっていたな、しかもあの人なんか強そうだし、今日頼ん
でみるか

俺は風呂からあがったときには雅さんがいた

雅「よあ、仲良くやってるじゃねーか」

俺「はい、おかげさまで 所で話があるんですが、いいですか？」

雅「ん？なんだ？」

俺「俺は明日から何年何組になるんですか？」

雅「お前は1-F組だ、学力は心配するなお前よりも頭の悪いやつはいるから」

俺「えええ！！いきなり高校生ですか！！」

雅「そうだよ、どうせあと少しで卒業だからよかっただろ」

俺「わかりました、それじゃ最後に一ついいですか？」

そして俺は雅さんの前で土下座した

俺「雅さん！！俺を強くしてください！あなたは四天王なんでしょ？聞き逃せといつても俺は絶対にそれだけは聞き逃せません」

雅さんは困ったような顔をしたがこう言った

雅「じゃあお前が川神百代に勝ったら俺の弟子にしてやろう」

俺「わかりました！！　　は？」

・
そうそして俺はいきなりクライマックスな展開へ進んでいった・

真剣で川神百代を倒しなさい（前編）（前書き）

風間ファミリーとも仲良くなった明だが、雅の一言ででかい壁に突き当たる・・・さて・・・どうなるんでしょうね・・・

真剣で川神百代を倒しなさい（前編）

僕はまだ布団の中今日は人生で一番の憂鬱だった・・・

もしかしたら死ぬかもしれない・・・最低でも半殺し・・・吐血・・・

・顔がぐちゃぐちゃ・・・

ば、ばかそんな変な妄想はやめろ！！もしそうなりそうなら参りま
したすれば・・・

いやだめだ！！逃げちゃだめだ

逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げ
ちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃ
だめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ逃げちゃだめ
だ逃げちゃだめだ

あれ？なんかこういうのってほかのアニメで・・・まあいいか
とりあえず俺は起きることにした今は6：00かぁ俺なりにずい
ぶん早起きしたなぁ～なんか静かだな・・・多分皆寝てるだろう・・・
・いいや、ちよつと散歩しにいこ

俺はさっさと着替えて島津寮からでて散歩することにした

俺「う～ん空気おいしいなぁ～」

そう思いながら僕は知らない景色を見ながら楽しんでいた

そうしているうちに俺が雅さんと初めて出会った河原に来ていたこ
こは本当にいい場所だ俺のお気に入りポイントに追加しよ

???「ゆーおーまいしん、ゆーおーまいしん」

俺「ん？こんな朝からランニングかぁ～すげえ～なつて・・・も
しや」

そこには赤いポニーテールの女の子がタイヤを引きずりながら走っ

ていた

そう川神一子だった・・・

俺「う、うん当たり前だよな俺は今この世界にいるんだからあれ、
なんでかな？なんか景色がぼんやりしてきた目から汗なんてよくないぞ俺・・・やばい、体からは汗はでてないのに目から汗が・・・」
俺はとづくにこの世界に來たことを実感してうれしさのあまり感動
してしまったのだ・・・

一子「君？なんで泣いてるの？大丈夫？」

俺「！？ いや、そのなんというかちよっと思ひ出し感動を・・・
あははは」

そうこうしてる間に一子は俺の所に近寄って話かけてきたようだ、
俺の挙動不審っぷりまじっペーわ

一子「私は川神一子！！君の名前は？」

俺「俺の名前は後藤明」

一子「明君っていうんだ、初めて見る顔だけど、転校生？」

俺「う、うんそうだよちよっと親の都合でね」

一子「そうなんだ、よろしく」

そして川神一子は俺に握手を求めてきた

俺「よろしく」

川神一子の手はとても柔らかかった・・・にしても本当に京といい、
一子といいすんごく可愛かった・・・二次元先輩まじばねえっす・
・本当に一目ぼれしそうになった・・・

俺「んじゃあ俺はそろそろ時間だから」

一子「うん」

そういつて俺挨拶を終えて島津寮に帰ることにした
戻ったときには朝ごはんもできていてそこに雅もいて皆と雑談して
いたようだ

雅「お前どこいったんだよ、ほら、早く飯食うぞ」

風間ファミリー「おお、お前どこ行ってたんだよ」

本当に俺は幸せ者だよ、一日一日が本当に楽しく思える

俺「あ、うんちよつと河原まで散歩しに」

麗子「ほら、今日は記念に朝からトンカツだよ」

キヤップ「うっしやああああ」

俺「（朝からトンカツとはこれまたいかに・・・」

朝飯も食い終わって部屋に戻どつてしたくななどをしていたら雅さんが部屋に入ってきた

雅「よお、今日から学校頑張れよ」

俺「はい、ありがとうございます」

雅「あ、あとな川神百代に勝てる必勝方を教えてやろうか？」

俺「！？」

雅「え、つとまずな・・・」

風間ファミリー「おい明くはやくしろ」

俺「今いく」

そして俺が玄関を開けたら身長が高いムキムキな人がいた、そうガクトだった・・・

おかしいな？また目に汗が・・・出させるか！！

ガクト「お前が明だな？俺様は超モテモテイケメンのガクトだ恋愛に困ったら俺様に相談してくれたまえ」

ガクトはドヤ顔で言ってくれた

俺「ああ、よろしく」

大和「さて、皆集まった事だし、いきますか」

俺は皆と雑談しながら河原までいくと週刊少年ジャソプをもったヲ

タクっぽい人が・・・いや

師岡卓也モロが来ていた・・・

モロ「ん？新入生？」

俺「福岡から引越してきた　後藤明だよろしく」

モロ「福岡かあゝ結構遠いところだね、僕の名前は師岡卓也よろしくね」

俺「ところで、そのジャソプは最新号？」

モロ「そうだよ、みる？」

俺「ありがと」

やつぱ3次元とまったく同じストーリーに全部すすんでいた

ガクト「やつぱお前もトラブルンみるよな？」

俺「いや、俺はワソピースと金魂くらいかな」

ガクト「なんだよ、お前もトラブルンみるよ」

俺「うゝん、考えとくわ」

そういつてワソピース読もうとした・・・ら・・・

【親方あゝ空から人間があゝ】

といわんばかりに空から川神百代が降ってきた・・・

百代「美少女、空から登場！！ん？みない顔が一人いるな」

俺「君が百代さんだね」

俺は今世紀最大の勇気をふりしぼって顔を真っ赤にしてこういった

俺「百代さん、俺と勝負してください！！」

風間ファミリー「「「「「！？」」」」」

百代「お、初対面で決闘かあゝお前なかなかやるなあゝ」

大和「おい、やめとけて命の保証はないぞ・・・」

百代「だがしかし、私はお前の名を聞いていない、あと決闘は今は無理だ学校で放課後やろうじゃないか」

俺「俺の名前は後藤明だ、放課後だな」

多分ざわめいたのはまわりにいる人たちからもざわついたのでろう
そうざわめいてるところにタイヤを引きずりながらポニーテールの
女の子いや、川神一子
がやってきた

一子「皆々おはようどうしたの？」

百代「ちよつとこいつから決闘を申し込まれてな、今日はいいい日に
なりそうだ」

俺「……。」

一子も「!？」みたいな反応したが、まあ今日俺に出会ってこの展
開だからな……

ああ……本当にやっちゃまったよ……雅さん鬼畜だわあ……

真剣で川神百代を倒しなさい（後編）（前書き）

なんかキャラと違った話方しているようで申し訳ないです
意味が分からない文章があつたら申し訳ないです
ついに川神百代と対戦ですね、生きて帰ってこれるのかな？

真剣で川神百代を倒しなさい（後編）

小島先生「今日のHRはこれで終わり気負つけて帰るんだぞ」

はぁ・・・とうとうやってきたのか・・・俺は緊張の汗が止まらなかった・・・

息も荒くなっていて、心拍数も上がっていた。

キャップ「どうした明？冬なのに汗かいて息も荒くなって」

大和「まあ、仕方ねーよなあ姉さんと戦うんだもんな」

俺「い、いや、べ、べつに、そ、そんなことはないぞ？」

大和「今のうちにキャンセルしてきたら？まあ、できそうにもないけど」

俺「俺から受けたんだ、今逃げるわけにはいかない、それに俺もただ単にあのひと決闘を申し込んだわけでもない」

キャップ「いろいろ大変そうだなーお前」

ガクト「おーいモモ先輩きてるぞー」

俺「来たか・・・」

百代「おーい明ー早くー」

俺は黙って闘技場みたいな所までいった・・・

怖い、本当に怖い、逃げだしたい・・・でも、逃げたらどうなるかぐらいわかるまた三次元にいたときの俺と同じだ俺は強くなりたいって雅さんに伝えたんだ！！だからこのチャンスのがすわけにはいかない！！

絶対な！！

side百代

こいつの気はあんまり感じられないがガクトより少し弱いって感じか？

何故あんなに怖がっているのに私と決闘がしたいんだ？

そしてとうとう闘技場までついてしまった・・・

つーかなんだこの観客の多さは？

あーあーこれで負けたらかなりダサいだろうなあ

まあ、いくら川神百代といっても女、そこまで力ないだろう!!

それ雅さんの言うとおりにすれば……てかあのひとなんか俺をおちよくってないか？

まあいいや

学園長みたいなじいさんがよってきたこの人は川神鉄心さんだな

[illegible]

とうとう始まってしまったか……！？

百代「はあー」

ものすごいスピードでパンチがくる、やっぱ化けものだわ……

しかし俺はとっさに雅さんが言っていたことを思い出す

~~~~~

雅「多分川神百代はすぐパンチでくるだろう、そこをでたらめでいいから一本背負いでいけ、お前昔柔道やっていただけだろ？」

~~~~~

たしかに俺は柔道をやっていたおかげ様で初段だ

俺は思いっきり一本背負いの形にはいった

俺「うおりゃ ああああああああ」

ん？腰が乗ったぞ？脇もがつちり決まっている・・・これはもしかして

百代「!？」

俺は思いつきり川神百代を一本背負いで投げていた

俺は正直驚いた・・・まぐれなのか? いや、雅さんがアドバイスをくれたにしも・・・!?

だとすると雅さんはすごい・・・こんな計算までして・・・

俺「うおりや〜」

俺は投げたあととつさにパンチを繰り出したが・・・

~~~~~

雅「お前はパンチはするな蹴りでいけ、ただでさえ力がないのに蹴りは力が無くても威力はある」

~~~~~

しまった!!

そのパンチは完全に止められていた

百代「よく私を投げたもんだな、だがお前のパンチはへなちょこだ」

俺「なっ・・・」

あの体制から俺は思いつきりはじかれてしまった

かなりとんだだろうな・・・

地面はやっぱかてえわ

俺「いったあ・・・」

そういえば全員がざわめいてるような

あの川神百代を投げたんだそりゃ驚くはずだ俺でもびっくりだ

百代「さて遊びはこれまでだ」

俺「え・・・」

と思った瞬間腹部に尋常じゃないほどの痛みが襲ってきた

俺「・・・ッ」

やばい息できない!!俺死んじゃう!!過呼吸になりそう!!

痛みと混乱がまじりあっていた・・・そしてだんだん意識が遠のい

ていく・・・

やっぱじゃけもんだわあの人・・・いや、ここで負けたら・・・強く
なれないかもしれん・・・

学園長がなにか声をあげて言おうとしているまづい！！
とつさに声をかけた

俺「まだ全然大丈夫です」

思いつきり声を出したはずなのに声はかかれていた

俺はなんとか息できないまま立ち上がることはできた

もう肩で呼吸をするというのはこういう事なのかと思いましたよ

俺「さあ、続けようか」

百代「気に入ったぞ、その精神」

百代はまたかなりのスピードでとびかかってきたしかし1度はあの
スピード見たんだ

俺はでたために思いつきり蹴っていた・・・なんかすごいスピード
で蹴った気がする・・・

百代「なっ!？」

俺は百代先輩の腹部にけりがあたっていた・・・今日は本当にラッ
キーだ

しかしダメージさほど聞いてないようで俺は思いつきり顔を殴ら
れた・・・そこからは意識がない・・・

side百代

なんなんだあいつ・・・少し油断しすぎたか？

にしてもあの気で2分持つとは・・・この先が楽しみだ

この後俺は黙って保健室を抜け出しあの河原へいったら雅さんがいた
雅「いやあゝお前の負けっぷりは見事だった」

俺「だいたい無理だよ!!あんな化け物・・・」

雅「お前がまさか俺のでたための助言で投げるなんてなしかも蹴り

も一発いれたんだろ？」

俺「え？でたらめ？またまたーそんな嘘を」

雅「いや、本当だお前は確実に強くなれる・・・いいだろう！！今日から俺は明の師匠だ！」

俺「本当ですか！！」

雅「ああ、本当だでも今日は少し休め明日から俺も鬼になるからな、いいな？」

俺「はい！！ありがとうございま・・・」

雅「おいおい泣くなよ、泣くのは百代倒してからだろ？」

明日・・・どうなるんだろうなあ・・・

真剣で青春しなさい（前）（前書き）

皆さん本当にゴメンナサイ！！京のキャラ崩壊注意です！！京が好きな人は読まないほうがいいかもしれません！

読み返したら意味不明な所続出・・・本当に申し訳ありません
進展なしといった所です

いやあの人は四天王に間違いない！！あの人は絶対そうしてくれ
そうだと

麗子さんから飯呼ばれたので俺は行くことにした

大和「まさか姉さんに1発くらわすとわなあゝ」

キャップ「本当だよ！何者だよ明は」

俺「いやあ、マグレマグレ……にしてもあの人本当に化け物ですな腹部に一発食らったときは死ぬかと思ったよ……」

大和「まあ……姉さんだからね、しょうがないよ」

俺「んじゃあ俺はちよつと筋トレでもしてくるわ」

大和「姉さんのパンチ2発食らったが、大丈夫なのか？」

俺「ああ、この通りだい。．．いつてええええええ！顔面腫れてるじゃん！！」

大和「今頃かよ!!」

じゃっかん腹部も痛いな・・・ジンジンくる・・・

そういえば玄関付近にダンベルが……

俺「あ、これか」

そこには普通のダンベルがあつた

俺「これだなよし……って重たっ！！」

多分10?くらいのダンベルだと思うだろう

これを1000回か・・・力入れるだけで腹部に激痛走るのに・・・

俺「1・・・2・・・はあ・・・7・・・9・・・10!!」

「があー！死ぬー！これは本当に辛いぞ！！」

俺「あと9セットかあー」

30回すぎたあたりから結構汗がでていた・・運動不足だなあゝ俺も

俺「50!!! はあ……はあ……ま……じ……きつい……」

50回すぎたころには汗まみれになっていた

俺「80回だこのやるおおおおおおお!!」

そう叫んで真正面向いたら川上一子と川神百代がたっていた

俺「あ、どうも」

な・・・なんているんだ？

百代「よお、もう元気なのか」

俺「力入れると腹部に激痛はしますけどね」

百代「にしても顔ひどいなーすまん、本気で殴りすぎた」

一子「お姉さまに一発いれるなんてすごいわ」

一子もこちらの会話に入ってきたようだ

俺「偶然ですよ、てかなんで島津寮にいるんです？」

一子「ここ温泉あるでしょ？だから私たちもたまに入りに来ているの」

俺「そうなんですか」

百代「んじゃあまたあとでな。一子いくぞー」

一子「はい」

そいつって川神百代と川神一子は去って行った

俺「さて・・・あと20回だな」

はあ・・・はあ・・・まじ・・・死ぬ・・・

時計を見ると8時を過ぎていたとりあえず風呂に入らねば・・・

俺はさっさと着替えを用意して風呂に入ることにした

にしてもきもちいなあートレーニング後のお風呂は

俺「はあー」

なんかお風呂つてすんごい気持ちいいね、なんだか眠くなるし

風呂をあがって俺は自分の部屋に戻っていたそこには昨日と同じように雅さんがゲームをしながら俺の部屋でくつろいでいたてか、な

んでお面してるんだろ？」

つて四天王でもゲームするんだ

雅「よあ、トレーニングお疲れさん」

俺「雅さん！！どこがゆっくり休めですか！！きつすぎですよ！！」

雅「なあゝにあれくらいで甘ったれんな、明日は5キロ走る予定だから」

俺「なあ！！」

雅「それくら余裕だろ、1年で百代を倒せるくらいになるんだから」

俺「あ、あと技とか教えてくれるんですか？」

雅「お前にはまだ早いからあとでな、んじゃあ俺は新しく始まるドラマ見ないといけないんでじゃあな」

俺「もう帰っちゃうんですか？」

雅「ああ、明日は河原でまってるから」

俺「わかりました！！明日頑張りますから！！」

雅「おう、期待してるぞ」

そうして雅さんは俺の部屋をでていった

今日はもう寝よう・・・いろいろと疲れた

んゝもう朝かあ・・・早めに寝たのに・・・今何時だ？

/ / 6 : 3 0 / /

もうこんな時間かよ・・・どんだけ寝てんだ俺は
とりあえず起きないと

俺は腕に力を入れた瞬間痛みが走った

俺「いたっ！！おいもしかしてこれは・・・」

そう筋肉痛だった1年ぶりの
本当にまいったなあ・・・

キャップ「明々めしだぞ」

やばいどうしよう・・・起きれない・・・

なんとか起きたみたいだ……にしてもいてえ……

ガクト「お前なんか今日はえらくぎこちない歩きかたしてるな」

大和が俺の腕を思いつきりたたいた

「なにすんだよ大和！！」

ガクト「ほーう」

俺「まじやめろってイテテテテ!!痛いから!!ん?なんだあれ」

モロ「また始まつてるね」

俺「？」

DQNA「お前がうちの奴らを潰したんだな？」

DQN B 「うるせえ！ぶち殺すぞてめえ」

なんか話しているみたい・・・と思うたらいきなりDQNの方から

とびかかってきた

大和「あーあ・・・」

大和が叫んだ瞬間にはも3人いたDQNがぶつとばされていた
1人は意識あるようだが残りの2人はもう意識がない・・・大丈夫
なのか？

百代「こんな美少女相手に3人もくるとは・・・許せんな」

そう言つて百代さんは関節を外して行つた・・・いやあーグロい！
っーかこんな人と昨日戦っていたのか・・・

ガクト「おいどうした明いきなりすわちまつて」

俺「ちよつとこんな人と昨日戦つたのかつて想像したら腰抜けちゃ
つて・・・」

ガクト「あつははははお前もまた決闘申し込んだら次は命ないかも
な」

どうやら俺たちの会話が聞こえてたらしく

百代「おーい皆ー」

モロ「またはでにやつたね」

百代「あんな卑怯な奴はこうでもしないと、あれ？ワン子は？」

俺「ワン子？」

いや、まあ知ってるけどね一応知らないふりを

キャップ「ワン子っていうのは一子のあだなんだあいつは頭なでると
犬みたいになるからな」

大和「まあ、笛吹けば」

そうやって大和は笛をぴーっと吹いたとたんに一子が現れた

一子「よんだー！？」

俺「うおっ！！」

いつのまにかあらわれる一子・・・やっぱ川神家はとんでもないな
百代「ワン子いかないと学校遅れるぞ」

一子「うん、もうひとはしりしてからいくわ」

そうして一子はまたタイヤを引きずりながら走って行った・・・すげえな

そういえば京は俺とあつていらいだんまりしてるな・・・俺の事嫌っているのだろうか

てあれ？京いなくね？と思っていたら京は大和にくつついていた
あいかわらずだなあ・・・

ガクト「京、おめえ最近元気ないなー」

京「ん・・・」

大和「そういえばそうだな明が来てから」

そこふれちゃう？

京「やまとが私と付き合ってくれたら元気になる」

大和「やっぱいつもの京だわ お友達で」

やっぱ俺の事嫌いなのかなあ・・・俺太ってるし・・・生理的に無理
とかいう奴かな？

そうこうしている間に俺たちは校舎まできていた

突然京が俺に話かけてきた

京「お前さあ・・・私たちに絡まないでくれる？」

俺「え・・・」

真剣で青春しなさい(後)(前書き)

ちよつとシリアスに書きすぎた・・・orz

誤字、脱字多すぎワロタww

いや、笑えませんね。本当に申し訳ありません

真剣で青春しなさい(後)

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

京が俺の所通りかかる瞬間『関わるな』といってきやがった

な・・・なにをいつているのか わからねーと思うが

俺もなに言われたかわからなかった・・・

頭がどうかなりそうだ・・・

催眠術とか・・・超スピードとか

そんなチャチなもんじゃあ断じてねエ

もつと恐ろしい片鱗を味わったぜ・・・

なにいつてんだ俺？それよりどういうことだ・・・

もう意味が分からなかった

俺「京、その話はあとで聞かせてもらおうじゃないかこのままだと納得がいかん」

京以外の風間ファミリー「……？」「……」

どうやら京は俺しか聞こえないようにいったようだ

・・・許せない！！なんだその卑怯な考え方は京お前そんな奴だったのかよ

京「んじゃあ、放課後屋上で」

そして俺は風間ファミリーから走って去って行った 悔しいよ俺・・・

昔の世界でもあんな感じだった・・・今の世界でも結局こうかよ・・・

・
そうやって皆からシカトぶっこまれるようになるんだよな

なんなんだよ、いつたい・・・

俺は1人で教室に入り席についた

俺はまたいじめられた時のような絶望を味わった
でも俺はこれくらいで負けない・・・

大和「おーい明どうしたいきなり変なこといいだして先いってしま
うとは」

俺「ああ、わりい」

ガクト「京になんかいわれたのか？もしや告白されたのか？」

俺「なわけねーだろー！」

ガクト「ジョークだよジョーク！そんなたくなつて」

そうこうしている間にチャイムが鳴った

「???」「今日から君たちの担任をするルーネみんなよろしくだよ」

あールー師範代かやっぱそっくりだわ

ルー先生「私は主に体育の先生だからよろしくネ」

この人大和たちが2年では担任もってないような・・・まあいいか

そして俺は今日福本育郎とスグルの友達になった、もちろん風間フ
アミリーとはしゃべったけどやっぱり京の言葉がつかかってあい
つらと話すのはつらかった

HRも終わり俺は屋上へ向かった

俺「どういう事だよ、俺のどこが嫌いなんだよ」

京「・・・。」

あまり小さくて聞き取れにくかったからもう1度聞くようにした
俺「おい、はつきりいえよー!」

そういつたら京がきれたかのように

京「お前は私にとって邪魔なんだよ!お前みたいな奴は嫌いなんだ
よ!!だから二度と私達とつるむな!!」

俺「・・・。」

俺はため息をして・・・いや涙をこらえて

俺「風間ファミリーの古参がいう事は　はむかえないからな・・・
わかった」

京は走って屋上からでていった

side 大和

なんだ明の奴?

今日は何か様子がおかしかったぞ

まあいいや一応俺も気になるし屋上で聞き耳していくか

京「お前は私にとって邪魔なんだよ!お前みたいな奴は嫌いなんだ
よ!!だから二度と私達とつるむな!!」

京・・・あいつなにいつてんだ!!

明が来てから京の様子がおかしいと思っていたらそういう事だった
のか・・・

京は走ってこちらへ来ていた

大和「京お前・・・」

京「や・・・大和・・・」

俺は無意識に京にビンタをしていた

大和「今日は緊急集会だ」

そうやって俺は風間ファミリーをなんとか呼ぶことができた

キャップ「なんだよ大和」

大和「全員そろったな、じゃあ今日は明と京について話そう」

ガクト「お、もしかして付き合ったのか？」

大和「ガクト黙れ!!」

俺が真剣で怒っていることにみんな気づいたのだろう

大和「京は明がきてから様子が変だと思わないか？今日だって明なんか俺たちとの接し方おかしかったし。それに朝明がくれたのも不思議だったろ？」

モロ「そつえば、そうだね。京なんかしたの？」

京「。。。」

大和「俺は少し気になって屋上に行くことにした」

百代「そしたら京が明に関わるなっていたんだろ、そしてあの時大和がビンタをはなったと」

大和「姉さんなぜしているんだ!!」

百代「私もあのときそこにいたからな」

ガクト「おい、京!! てめえーどういっつもりなんだよ!!」

一子「そうよ京、明なにかしたの？」

そうといつめると京は泣いて言ってくれ

京「怖かった・・・」

キャップ「え？」

京「明が入ったら今楽しい生活が変わるんじゃないかって・・・私は嫌だったの風間ファミリーに新しい人を入れることが」

そついうと俺は京を抱きしめていた

京「!？」

大和「明が変な奴に見えると思うか？」

ガクト「あいつちよつと化け物に決闘申し込んだ馬鹿だけど、すごいやつだったぞ」

百代「ガクトく化け物って誰の事だ？」

ガクト「いや・・化け物じゃなくてびしょ・・・ギヤアアアアアアアア」

キャップ「あいつすげえ面白そうじゃん」

モロ「そうだよ、僕も明はそんな根に持った奴には見えなかったけどね」

一子「私も明君はとても悪い感じに見えなかったわ、だから京別に変わらないから安心していいわよ」

大和「それでもお前はなにか意見はあるか？」

京「ない・・・」

大和「じゃあお前は謝ってくるんだな。できるか？」

京「うん」

大和「よし、じゃあそろそろ離してくれないか」

京「このままがいい」

大和「おい、お前はまず謝りにいくんだろうがー」

百代「そうと決まればあいつを探さなくてはな」

大和「それなら多分河原にいるだろうよ」

こうしてなんとか京とも解決できたし、一件落着だな

side out

雅「お前なに顔ぐしゃぐしゃにしていってるんだよ、振られたか？」

俺「うう・・・そおなんじゃあないんですよ・・・」

雅「じゃあなんだ、俺に話してみる」

俺「今日な京から・・・（以下省略）」

雅「あつはははお前も災難だな」

俺「笑わないでくださいよ！！こちら真剣なんですから！！」

雅「実はそうでもないぞ」

俺「え？」

雅「ちよつと缶コーヒー買ってくるわ」

俺「えちよつとまってくださいよ」

そっいつて雅さんはどこかへ行ってしまった

大和「おーーい明ー」

真剣で仲直りしなさい！（前書き）

明もとうとう鍛錬開始！！京と仲直りはできたのでしょうか？

真剣で仲直りしなさい！

雅さんが缶コーヒー買いにいったあと

大和たちが来ていた

もちろん京も

俺「どうした？」

大和「ほら、京」

京「あの・・・その・・・今日はごめん・・・」

俺「・・・。」

京「怖かったんだ・・・明が入るといつもの風間ファミリーじゃないような気がして、だけど・・・明はそこまで根に持った奴じゃないし、よく考えたら私逃げていたのかもしれない・・・」

俺「b」

俺は黙って親指を上げた

俺「改めて、よろしくな京!!」

京「よろしく!!」

キャップ「あ、ずるいぞお!!なんか2人で青春しちゃって俺も混ぜろ!!」

モロ「そこにキャップ混ぜたらだめでしょうが!!」

そういつて俺たちは笑っていた

キャップ「よし、こうなりやあ今日は仲直りパーティーだな!!」

俺「すまん、今ちよつと忙しいんだまたいつかその仲直りパーティーをしよう!!」

大和「そうだ!!じゃあ金曜集会のときにしよう」

ガクト「いいな明もまだ俺たちの秘密基地もしらないだろうし」

モロ「そうだね。その時に明の歓迎パーティー含め仲直りパーティー

「うん」

俺「うん、楽しみにしてるよ」

「なんだかたのしくなりそうだわ!!」

そうやって皆帰って行ったときに雅さんが来ていた

雅「おおう、ずいぶん顔がさわやかになったじゃねーか」

俺「見てたくせに」

雅「へへっばれちまつたか」

俺「さあ、雅さん！！鍛錬しましょう！！」

雅「そうだなんじゃあ今日は5?の所を6?で大サービスだ!!」

俺「サービスなの……かな？」

雅「つべこべいわず走りやがれこの弟子がああああ」

俺「わわわわ！わかった、わかった」

3?くらい走っただろうか・・・汗が滝のようにでている・・・

俺「はあ……はあ……」

雅「そくと落ちてるぞ、さもなくば・・・」

そういつて竹刀をたたき出した

俺「いてえ!!!し……ぬ……はあ……はあ……」

雅「ほら！！あと半分！！頑張れ、頑張れ」

俺「ぐおおおおおおおおお！！」

雅「なんとか6?走り終えたようだな」

俺「はあ．．はあ．．ちよつと吐いてもいいですか？」

雅「あまり人がいないとこ……ってここで吐いてんじゃねーよ

!!
L

俺「才□□□□□□! ! うう」

雅「しょうがねーなーったくほら、準備運動はこれまでだ」

俺「準備運動!!」

雅「さあ、次腹筋300回だ」

俺「しぬうゝゝゝ」

雅「ほれどうしたあと100回!!」

俺「1年もなにも運動してないと本当にきつい・・・」

雅「やっと終わったか」

俺「はあ・・・はあ・・・吐いてもいいですか？」

雅「ここではくなああああああ!!」

俺「ビニールどう・・・オロロロ」

雅「つたくも胃がすつからかんじゃねーのか？」

俺「そうかもしれません・・・」

雅「んじゃあ最後だ、お前は俺の攻撃を避けてもらおう」

俺「なんですと!!」

雅「それいくぞ」

俺「ぐあっ!!いてえ!!腫れてるのに・・・」

雅「こんなすろーのパンチもよけきれねえのかよ!!」

俺「どこがスローですか!!俺軽く吹っ飛ばされそうになりましたよ!!」

俺はいま・・・島津寮に向かっていている所だ・・・意識がもうろうとしている・・・

俺「ただいまあー・・・うう・・・」

キャップ「おかえりー　ってうぎゃあああああああ!!おばけだあー」

俺「誰がお化けだ!!」

大和「どうしたキャップ・・・っておい・・・本物のお化けを拝めるとは・・・」

京「うわ・・・本当にお化けがいる・・・」

俺「お化けじゃねえええつつてんだろ!!後藤明だ!!うつ・・・吐き気が・・・」

俺は玄関を飛び出しすぐ吐きに行った

俺「オロロロ・・・うういてえ・・・」

ふう・・・なんとか吐き気はおさまったみたいだ
キャップ「お前いつたい何してたんだよ」

俺「鍛錬」

大和「お前本当に姉さん倒そうとか思ってたないよな？」

俺「うん!!今は」

大和「今はってなんだよ」

そこにちょうど源さんが通りかかった

源さん「うわ、こんな時間帯に幽霊か」

俺「源さんまでか!!!!」

どんだけ俺の顔ひどいんだよ!!

俺はとつと風呂に入ることにした・・・ってかちよつと鏡で俺の顔見
てみよう

俺「うわ!鏡に幽霊」

そんなくらい俺の顔は腫れあがっていてひどかった・・・

雅さん・・・鬼畜・・・

俺は飯食うの忘れて気が付いたら寝ていた

俺「うーん・・・今何時だ?それにしても腹減ったなあ・・・そう
いえば俺夜飯くってやないじゃん!!」

デブあるうものが飯を抜くなど言語道断だ!!急いでなにか食わな

ければ・・・って朝飯まで待つしかねえな・・・

俺は朝起きて柔軟をしていたらとつくにこはんができていた
どうやらジャストタイミングで起きたらしい

俺「おかわり!!」

麗子「明君よく食うね」ほら、まだいっぱいあるから」

大和「そういえば昨日明飯食ってなかったな」

俺「昨日は唇切れてて飯食える問題じゃなかったよ・・・まだ痛いけどね」

そうして俺は準備もして学校へ登校しにいった

ガクト「おーっす皆おはよーって明なんだその顔は!!」

やっぱまだ治ってないんだ

俺「いやあー師匠のパンチがきいてさあ」

ガクト「師匠!？」

大和「ああーこの前きてた人だっけ?あの人強そうに見えたか京?

京「うーん・・・気はあんまり感じ取れなかったけど・・・」

俺「(四天王の事は隠そう)」

俺「ま、いいじゃん!!さあ皆いこうぜ」

そして俺はモロ、一子、百代さんに顔の事いじられてなんとか学校
に到着・・・どうせまたいじられるんだろうな・・・

そういえば昨日もだが皆俺を見るなりざわついてたな・・・なんで
だ?

あああああああああああ!!しまったあああああ忘れてい
たああああ!!

そういえば俺一昨日百代さんと決闘したんだった・・・だから俺はこ
んなに有名に・・・

モロ「やっぱ決闘の成果がでてるね」

俺「悪い方にね・・・」

学校は風間ファミリーとスグルとよんぱちくらいとしか話さなかった

スグル「やっぱ女は二次元に限るぜ」

こいつ高１もこうだったのかてか、２次元の２次元ってどゆこと？

そしてHR

ルー先生「金曜からスポーツテストを行うネ、しっかりそれに向けて鍛錬するネ」

スポーツテストか・・・俺最下位決定だな

初めての金曜集会（前書き）

タイトルがいつもより違和感あるのは見逃してください

初めての金曜集会

俺「うう・・・はあ・・・はあ・・・」

雅「おつかれ。明日スポーツテストなんだって？」

俺「そうなんですよルー先生も早く言っただけいいものだ。ってか前から思ってたんですがなんで雅さんそんなに情報詳しいんですか？」

雅「師匠あるものお前のすみずみの所を知らなくてはな、何時に賢者になったのか何時にカメハメ派の練習したのか」

俺「だああああなんでしってるんですかああ。てか痛いからやめてええええ」

雅「お前は本当技とかそういうの好きだな」

俺「だって雅さん教えてくれないじゃないですか」

雅「お前にはまだ早い！！それよりお前はまず基礎を鍛錬することだな」

俺「たちは今なにしてるかって？今は鍛錬中でちょうど？走り終えて少し雑談してるところだ

おかげさまで今日の学校は皆俺を化け物を見るような目で見てやんの・・・痛いねー

俺「てか、雅さん俺の顔どうにかしてくださいよ。もう大変だったんですから！！あと俺この傷ついたまま練習続けると体持ちませんよ」

雅「川神流・・・瞬間回復！！」

俺「なっ顔の腫れがひいていつてる！！てかなんで川神流を・・・」

雅「ドヤア・・・（・・・）」

雅さんは強いんだか、不真面目なのやら……

俺「ドヤア・・・じゃないですよ！！なんで雅さんそんなのできるんですか？」

雅「四天王なるもの、どんな技もマスターすべし」

俺「やつぱあなとも化け物だったんですね。じゃあもう川神百代にも勝てるんですか？」

雅「うん、勝てると思う」

俺「勝てる！？日本で一番強いと恐れられているあの人に！？」

雅「日本でだろ？世界はまだ広いぞぉあのクラスが結構いるからな」

俺「え？あなた世界の四天王なんですか？」

雅「ごもつとも」

[illegible]

雅「さあ、話はこれまで今日は腕立て300回と背筋500回な」

俺「また地獄か・・・」

雅「なんかいつた？」

俺「いってません！　いってません！！だから竹刀は持たないで」

にしても雅さんは世界の四天王だったとは俺こんな人に弟子入りしてしまったのか

俺ももしかしたら本当に百代さん倒せるんじゃないかな

「いや、今は鍛錬に向かうまでだ」

雅「なに考えてんだ！余計な考えは自分を弱くするぞ！！」

俺「すみません！」

にしても昨日ハードだったせいかな今日はそこまできつくはないな
気のせいかな？もちろん汗は滝だが

俺「はあ・・・はあ・・・きつちい・・・」

雅「はいでは最後のトレーニング 『パンチを避けよう大作戦』」

俺「なんすかそのネーミングセンスは。ってまたやるんですか!!」

雅「そうだよ今日はお前も攻撃してこい!!」

俺「わかりましたそれじゃいきます うおおおおりやああああ」

雅「ふん」

俺「ぎよえっ!!」

雅「ほらほらどうした」

なんだか雅さんとの鍛錬はそこまで苦しくはなかった・・・てか雅さんとの鍛錬は楽しかった

まだ鍛錬したい!!もっと強くなりたい!!

俺はそういう気持ちがどんどん増すようになっていった

俺「うう・・・いてえ・・・」

雅「瞬間回復」

俺「うおおっ!!すげえ」

雅「ほらよ顔はさすがにかわいそうだからな」

俺「あはは・・・もう1歩も動けないです」

雅「なーにいつてんだ、そこでお前が島津寮まで帰ったら強くなれるんだ」

俺は精いっぱい力をふりしぼった・・・

俺「はあ・・・はあ・・・」

雅「うむ、やればできるじゃないか」

意識が・・・もつろつとしてやがる・・・

雅「それじゃあ俺は帰るから ほら水」

俺は水を一気飲みした

俺「やっと・・・ついた・・・」

俺はなんとか自分の部屋までたどり着いて着替えをもつてすぐ風呂に入った

さすがに風呂に入らず寝たらいかんからな

風呂から上がって着替えてた時には意識がはんぱじゃなく途絶えていた

俺「うう・・・はやく・・・もどらね・・・ば・・・」
ドサッ

源「おい明！お前こんな所でねてんじゃねーよ！」

俺「うう、ごめん源さん」

源「ったくお前は。ほら手を貸してやるよ」

俺「ごめん・・・」

源「勘違いすんな、お前みたいな巨体が廊下に倒れていたなら迷惑だからな」

源さん優しすぎ・・・まじ・・・シンデレレ・・・

俺「んっいい朝だなあ」

どうやら自分、寝ると精神も体も完璧に回復するようです
そつえば今日はスポーツテストだな

俺「柔軟でもしとくか」

そして俺は皆と一緒に通学路へ

ガクト「あれ？お前もう顔治ってるじゃん」

大和「明かなり腫れていたのになパンパンマンがアンパンマンに戻ってる」

俺「最後の一言は余計だぞ」

京「ナイスツツコミ」

「みんなーおはよー」

モロ「ワン子おはよー」

てかモロいつのまに

ワン子は百代さんと一緒に登校していた

ワン子「あれ？明もう顔治ってる」

百代「！？」

side百代

おかしい・・・あんなに昨日腫れていたのに今日で元通りに治ってるなんて

しかも昨日も鍛錬してたと思うが

まさか『瞬間回復』！！

それ以外はありえないぞ！

そういえばあいつには師匠がいるとかいつていたなちょっと会ってみたいもんだな

百代「おい明。お前そういえば師匠がいるっていつてたな」

明「ああ、雅さんの事ですか？」

雅だど！？あの世界四天王の1人【郷田雅】 日本で一番強いとされている奴が

ていうかあの入失踪中じゃなかったのか？

百代「そいつに合わせてくれないか？」

明「あー別にいいと思いますよ」

少し手合せしたいものだな

Side out

そして俺たちは学校につき朝から始まるスポーツテストに向けて準備運動していた

キャップ「そっいえばお前なんか痩せたか？」

俺「おかげさまで？ 痩せました」

キャップ「4日で3?! どんないトレーニングしてるんだよ」

俺「まあ、デブは痩せやすいって言うからね」

大和「いわねーよ！」

そしてスポーツテストでは

ガクト「ちえっ 握力80かよ」

大和「俺60だわ」

明
「俺
7
0」

そういえば百代さんとかあんな化け物ってやっぱオーバーしちゃうのかね？

そしていろいろやっ たんが、まあ出来は最悪

恥ずかしいので握力くらいしか皆に見せられませんが、あとはかなり悪いと思っています。ご了承ください。

スポーツテストも終わり俺たちは下校をしているところだった

キャップ「よし、今日は金曜集会だな」

俺「それじゃあ場所を教えてもらおうか」

キャップ「そうだな」

大和「了解」

そういえば雅さんにメールうつとかねば

結構アドレス帳増えたな

前はあんなにいじめられていたのに・・・ずっと部屋の中ひきこもっていつも泥沼の人生を送っていて・・・いまじゃ・・・いまじゃ・

俺はもう思い出すだけで涙がでそうになった・・・いかな

ガクト「明なにしてんだよ、早くいくぞ」

俺「おう！」

そしてついた所は廃ビルだった結構立派だなあ・・・

中はとても綺麗で、誰かが掃除しているようだった。そういえばアニメでも風間ファミリーが掃除やってるんだっけ？

そして俺の歓迎パーティーそして京との仲直りパーティーをやってくれた、本当にいいファミリーだよ

百代「あと1年であいつが帰ってくるのかーどこまで強くなってるんだろうな」

一子「もう1年たつわね絶対お姉さま超えてるわよ」

ガクト「なつかしいな、もう1年か」

俺「あいつ？誰ですか？」

百代「私の本当の弟さ、去年から修行にいつてるが来年で帰ってくるだろう」

俺「へえ、知らなかった。名前はなんていうんです？」

百代「川神隆たかしだ私と同じくらい強いぞあいつは今じゃもう私をとつくに超えてるだろうが 帰ってきて闘うのが楽しみだ」

俺「化け物が2人とか・・・バイオハザードかよ・・・」

百代「ん？化け物が2人？バイオハザード？誰の事いつてるのかな？」

俺「あ、いや間違えましたびし「川神流 正拳突き」ぎゃあああああああああああ、息できない！！息できないですうううう酸素くれええええええ」

モロ「あつはは明もだんだん馴染んできたね」

京「大和も早く私を大和色に馴染ませて（ぽっ」

大和「意味が分らんわ！！」

こうやってワイワイ騒いでいるとキャップいきなり大声でこういった

キャップ「よーし！！今度のゴールデンウィーク旅行いかないか？」

ガクト「おおーいいなそれ俺様も賛成だぜ」

モロ「いいね僕も賛成だよ、明もいくでしょ？」

明「x○+*/」

大和「賛成だつて」

モロ「よくわかったね・・・」

一子「ちなみにどこにいくの？」

キャップ「それはな・・・モロ大好きな秋葉原だ！！」

百代「モロみたいな奴がいつぱいいるところか・・・なんか嫌だな」

モロ「どういふことだよ」

京「旅行としては近くない？」

キャップ「うーんおもしろそうだったんだがな」

大和「名古屋とかどうよ」

明「おお、名古屋かいいな」

モロ「あれ、明もう大丈夫なの？」

明「やっとな酸素するようになったよ、死ぬかと思った・・・」

ガクト「俺様も名古屋がいいぜ」

キャップ「んー皆がそういうなら名古屋にするか」

風間ファミリー「・・・おー！！！！」

金曜集会も終わり俺は雅さんに電話して河原へ

雅「今日のはあんまりトレーニングできないな。ってお客さんかい？」
百代「あなたが世界の四天王、雅さんですね」

雅と百代（前書き）

ちよつと話すシーン変えてみました
誤字、脱字があつたら申し訳ないです

雅と百代

うーむなんか修羅場になる予感俺帰ろうかな

雅

「今日はあんまりトレーニングできないな。ってお客さんかい？」

百代

「あなたが世界の四天王【郷田雅】さんですね」

雅

「お、君は川神百代かな？ずいぶんと大きくなっちゃって」

なんで雅さん百代さんの事してるの？
というか雅さんの苗字【郷田】なんだ

百代

「!？」

雅

「まあ、覚えてないのも仕方ないよ百代ちゃんが1歳の時に訪れたからね隆君は元気かい？」

百代

「そうだったんですか。隆は今修行に出ています」

雅

「修行か、あつて見たかったものだな」

俺

「雅さんって元川神院だったんですか？」

雅

「ああ、俺は親から捨てられて川神院で育ったからな。百代ちゃんと鉄心さんからよく聞いているだろう」

百代

「はい、世界の四天王だってことは聞いておりましたが・・・行方不明になったんじゃないんですか？」

雅

「ああ、失踪というか少し旅にでたかな　マスコミにも言わずに突然姿を消したからな」

百代

「そうだったのですか・・・しかしなぜ明の師匠なんかに」

雅

「俺はもう鍛えることに飽きた、俺はこの明を強く育てようと思ったんだ」

俺

「え！！でも百代さんに勝たないと師匠にはできないって」

雅

「あれは少し明を試してみたのさ、そこで百代ちゃんに決闘を申し込むだけでも俺はやりがいがあったのにまさか投げたり打撃を食らわせたりするなんてね、私は本気で君を強く育てようと思ったよ」

百代

「（だから、あの時私に決闘をいどんできたのか）」

雅

「まあ、そういう事だ明早くしと今日はあんまりトレーニングする時間がないぞ」

百代

「ねえ雅さん」

雅

「ん？」

百代

「私と決闘をしてくれませんか？」

雅

「うむ。。。困ったものだ」

鉄心

「雅よ、久しぶりじゃの」

雅

「げっ！！鉄心さんいつのまに！？」

鉄心

「百代の帰りが遅かったのだから来てみれば。懐かしいのう、それより百代と少し相手になってくれんかね？最近百代は戦いたくてうずうずしとるんじゃない」

雅

「鉄心さんがいうのなら・・・いいでしょう。明 今日には鍛錬は見学だ」

俺

「お！？雅さんと百代さんの決闘が見れるんですか！！」

鉄心

「ほう、お前さんはルーの所の、百代との決闘見事じゃったぞ」

俺

「ありがとうございます」

鉄心

「にしても明の師匠を持つとはな、少し話を聞かせてもらおうか」

雅

「決闘が終わってからで」

そして俺は初めて川神院にきた観光地ともなってるんだっけ？
にしてもすごいところだなここは

そして雅さんと百代さんは決闘場みたいな所へいた

俺はその周りで見物することにしたなんか川神院の人たちがいつばいできた・・・川神院にいる全員がとても強そうだった・・・川神院はすごいな

そしてワン子やルー先生もでていて俺にきづいたようだ

ルー先生

「おお！明こんな所で何をしているネ お！あれは雅さんじゃないか・・・百代と戦うとは・・・これは見ものだネ」

俺

「俺あの人の弟子なんで、ちょっと見物しようかと」

ルー先生

「！？ そうだったのか、だから百代相手に2分も持ちこたえられたのかナ？」

俺

「あれはまぐれだと思いますよ」

ルー先生と話していると鉄心さんの声が聞こえた

鉄心

「はじめえええええ！！」

一子

「あ、今はじまったわ」

雅

「さーってじゃあ最初の挨拶として」

そういつて雅さんは百代さんを睨めつけたと 思った瞬間全員が凍り付いていた・・・まさか！！

俺

「雅さん！？もしや・・・あなた・・・D○○様の技を」

雅

「誰だよD○○様って！！お前は殺気も感じ取れないのか！！」

百代

「なんだこの殺気は・・・いままで初めてだぞ、あまりの殺気で動けん」

雅

「殺気でおしまいと言わないでよね」

百代

「くっ・・・」

百代さんはなんとか頑張って動いたみたいだ

ものすごいスピードで雅さんにパンチや蹴りを繰り出しているっーかはええー！！みえねー！！

雅

「よっ、ほっ、それっ」

雅さんはそれを笑顔で避けている・・・てか遊んでいるようにも見える

さすが世界の四天王といったところか

まわりを見ると全員が口をあんぐりあけていた

俺も口がなかなか閉じてくれない・・・

百代

「川神派！！」

百代さんはすごいカメハメ派みたなものを打っていた

すげー必殺技だー！！！！

雅

「おお、なかなかでかい気弾を打つじゃないか、ふん！！」

雅さんは思いつき蹴りで気弾を切っていた・・・切っていた！！
俺の表現のしかたおかしいのかな・・・？

でも俺はこいうすごすぎてこいう風にしか説明できなかった

雅

「さて、明！！これが最初に教えてやる必殺技だ、よくみとけよ」

そいつって雅さんはしないをとりだしたそして目をつぶって力を抜
いていた・・・

俺

「なにしてるんですか雅さん！！やられますよ」

百代

「川神流 正拳突き！！」

ももよさんは雅さんの方に襲い掛かってくるこれはやられるだろう・
・

雅

「はっ！！」

！？

雅さんが瞬間移動したと！？

やばい、本当に見えなかった・・・

百代

「ぐっ……」

百代さんは倒れた

鉄心

「そこまでええええええええ!!」

雅

「これが俺は教えてやる必殺技【居合】だ」

一子

「す・すごいわ・何が起きたのかまったくわからなかったわ」

ルー先生

「私もだヨ、さすが世界の四天王ネ」

雅

「そんじゃあ俺は帰りますんで」

そっいつて俺を抱きかかえた

鉄心

「こらまつのじゃ雅」

雅

「話はまたこんどー」

俺

「すごいですね・・雅さん」

雅

「ああ、百代は本当に強いな俺も少し怪我しちゃったよ」

俺

「!？」

雅

「油断しすぎた、5か所くらいはかすつちまったかな」

俺

「百代さんも百代さんすごい・・」

雅

「うむ・・あそこまで強くなるとわ・・隆が1年も旅にでてる
といったな・・」

俺

「それにしてもあんなに居合がすごいなんて」

雅

「ああ、あとお前は殺気もかんじることができんのか!」

そうやって雅さんに殴られた

俺

「いてて、なんか俺には感じとれないみたいです」

雅

「まったく・・・ある意味すごいんだけどな」

俺

「え？」

雅

「どんな人でも俺がさっき放った殺気は誰でも反応するだろう・・・
殺気がわからないお前はちょっと有利かもな」

俺

「それほどでもー」

雅

「褒めてねええよ！！」

俺

「いてっ！！」

そして俺は島津寮に戻った

side 百代

「百代、大丈夫か？起きろ」

百代「ん・・・私は・・・」

鉄心「完全に遊ばれておったの」

そうだった雅さんとの決闘で負けたんだった
殺気といいわざといい本当に桁外れだ

百代「なんなんだ最初雅さんが放った殺気は」

鉄心「うむ・・・まさかあそこまで殺気がすごいとわ、わしも一瞬動けなかった。百代ももっと鍛錬しないとな」
百代「ああ、そうだな」

あれが世界の四天王か・・・とてつもなく強かった私もいずれ明にこされるかもしれないな

明 初めての決闘（前書き）

戦いを文章で表現するのは難しいッッ!!

明 初めての決闘

一子

「にしてもすごかったわ！昨日の試合」

大和

「まさか姉さんが負けるとなあー」

キャップ

「明の奴俺たちに黙って・・・ずるいぞお！！もっと早く教えろ」

俺

「そんな事いわれても」

京

「あの人そんなに気は感じられなかったけどね」

百代

「明にはいつか負けるかもなー」

風間ファミリー「「「え！？」」「」」

モロ

「僕もあつてみたいなーその明の師匠とやらに」

ガクト

「俺様のその人の弟子になつてみてえなあ・・・絶対もてる秘訣と

か知ってるよ」

京

「ないない」

ガクト

「ひでえ〜な京、また大和に振られたのか？」

京「もう500回超えるよ 大和好き」

大和

「お友達で」

京

「も〜」

百代

「（私ももつと強くなければな）」

そう話していると1人の男がこっちに立ちふざがってきた同じ1年だ
と思うが

「おい！お前が明だな、俺と勝負しやがれ」

明

「百代さんチャレンジャーがきてますよ」

皆

「「「お前の事だよ」「」」

明

「え？俺？」

普通に強そうなんですけど

俺

「え．．いやだ」明がiiiってよ「ちょっと百代さんなにいうてるんですか！？」

百代

「明の試合も楽しみだ」

「よし！ならここで勝負だルールは川神学園の決闘と同じルールで」

俺

「そんなあゝ」

男

「うおおおおおおゝ」

男はパンチをくりだすが．．．なんかいつもトレーニングで雅さんが出すパンチより遅いな．．しかもそこまで痛くない

俺

「．．．．．」

男

「な、もういっちょ」

俺

「よっ」

男

「この野郎」

次に男は蹴りをだしたが・・・うゝんこれも雅さんのトレーニングの奴とは・・・正式に鍛錬して二日しかやってないのに

俺

「大外狩りじゃあゝゝ」

俺は思いっきりあいての頭をつかんで大外狩りをした、なんとかかかってくれたようだ
よし！今のうちに

俺

「参りましたゝゝ」

俺はそういいながら走って逃げた

男

「おい！まて」

困ったなあゝ・・・これから俺に挑んでくる人いるんだろうな
ああ、憂鬱だ

なんとか校舎に到着いそいで1-Fまで走って行った

俺

「ふうゝあぶなかった」

俺は席についてこれからどうするか考えていた

ヨンパチ

「よお、明どうしたそんなに焦ってなんかパンツでも見えたのか？」

俺

「襲われた・・・」

ヨンパチ

「え！？女子に？まじで！？」

俺

「男子に」

ヨンパチ

「なんだよゝ期待したのに」

俺

「俺の体系をよく見てから言っただな」

ヨンパチ

「そうだな・・・おおゝ同志よおゝ」

俺

「いやあゝ百代さんから決闘を申し込んだせいか、これから絡まれやすそうだな・・・」

ヨンパチ

「で、どうしたのよ」

俺

「逃げてきた」

そう話していると風間ファミリーの皆が来たみたいだ

キャップ

「なににげてんだよぉ」

ガクト

「そうだが、お前あいつのパンチ避けてたじゃねーか」

俺

「あれはだな、百代さんが勝手にだな」

大和

「でも、逃れられる相手じゃないみたい」

男

「てめえどういっつもりなんだよ！早く決闘しやがれ！」

俺

「ああゝもうなんでこうなるんだよゝ」

男はなんか紋章みたいな奴俺に投げてきた

あれは決闘をしめす奴だな

俺

「ことわ・・・ってなんで百代さんがいるんですか!!」

百代

「ほらよっ」

俺

「うわぁ～～俺飛んでる～」

そういつてとばされて俺の紋章が落ちて・・・相手の紋章に・・・
つてぎゃあああああああああああああああああああああ
ああ!!

俺

「いやだぁ～～大和お～～help! help! help me
- - - - -!!」

大和

「まあ、きまったことはしょうがない」

決まってるねーよ!

俺

「はぁ～～」

男

「(こいつ潰せばなかなか有名になりそうだからな)」

そして朝のHRは決闘でつぶれましたとさ

学園長(鉄心)

「それでは はじめええええええええええい！」

始まったことはしょうがない

俺

「よっ、せいやっ」

俺は蹴りで攻めることにした まだ力がないからな

男

「ぐっ この野郎」

とびかかってきた瞬間だな、俺は百代さんとの対決でこの瞬間を忘れたことはねえ！

俺はそのタイミングを見計らって背負いで・・・

俺

「ふん ん？投げれてない？」

男

「馬鹿め、俺も柔道部なんだよ」

まじかよ

俺

「小内狩りはどうだ」

男

「おっとあぶねえ」

よし来たなこいで

俺

「うおりゃあああ」

俺はとっさの瞬間俺は内またを決めていた

男は綺麗に投げられた

男

「うん」

俺のすかさず絞めに入った

俺

「はい、タップしようねー」

男

「うぐっ」

どうやら男は落ちたようだ

学園長

「それまで」

觀客

「おおおおおおおおお！」

俺なんか目立ってきてないか？

「なかなかあいつ強いな」

「そうですね、でもユキにはまだ及ばないでしょう」

「ぼくのほうがまだつよいもんねー」

キャップ

「お前強いじゃねーかよ」

俺

「もう隠し技が無いよ、次こられたら時はおしまいだよ」

モロ

「多分もう一時期は誰も決闘申し込まないと思うよ」

俺

「にしても百代さん!」

百代

「ん?なんだ?」

俺

「無理やり対決させるとかひどすぎるでしょ!...もうやめてくださいね」

大和

「そつだよ姉さん」

さすが大和！！ええやつちなー

百代

「いいじゃないか買ったんだから結果オーライ」

一子

「次は私が対戦したいわね」

俺

「さっきの事聞いてましたー！？」

一子

「わわわ、冗談だつて。怒らないでよー」

ワン子は本当にかわいいな
なでなでしたいが・・・俺は太ってるし、きもいからな・・・や
めておこう

そしてみんな教室に戻り

ルー先生

「明 さっきの試合よかったヨ」

俺

「ありがとうございます」

うん、ちゃっかりクラスでも有名だ

女子A

「明君やせればカッコいいのにね」

女子B

「わかる！！いまはちょっと生理的に無理かな」

「じゃかわいいボケ！！こっちまで聞こえ取るんじゃない！！」

そして学校も終わり、皆と別れて雅さんと鍛錬しに河原へ向かった

雅

「よし、今日は6？走るぞ」

俺

「うっしやああ！」

雅

「それとお前は柔道技はあんまり使っな」

俺

「なぜしってる」

雅

「ちょっと今日鉄心さんと話しててたな」

俺

「そうだったんですか」

雅

「ああ、柔道技ばかりたよるといざ勝負するときに使えるこぶしも使えなくなるぞ？んじゃあ走るぞ」

そして走って腕立て300、腹筋300し終わった時に

雅

「今日は新しい稽古だほらっこれ使え」

そういつて刀を渡してきた

俺

「日本刀!？」

雅

「レプリカだ、川神学園から借りてきた」

俺

「居合の練習ですか」

雅

「そのとおり。まず目をつぶって力をすべて抜くようなイメージをしろ・・・そして俺は『いまだ!』といった瞬間に昨日の事をイメージするようにやってみる 最初は動かなくていいから刀だけふればいいさ」

俺

「・・・・・・・・。」

30秒が過ぎただろうか

雅

「いまだ!」

俺

「はあっ!！」

雅

「うん、まだまだだな　もっと力を抜かないと」

これから楽しくなりそうだ

居合の完成（前書き）

台本のような書き方で読みづらいという事なので変えてみました。
クリスマス？俺は仏教だから関係ない！！

居合の完成

居合を練習してもうだいぶたつな。でもまだ完成してない
もう手には豆だらけだ

「そつえばお前ゴールデンウィークどうすんの？」

居合の練習も終わり、ゆっくりしているところに雅さんが話かけて
きたようだ

「キャンプ達と名古屋に旅行に」

「そうか、まあくれぐれも鍛錬はしとけよ」

いついかなるときにも鍛錬はかかさずやらいとな！

「それじゃあ僕はもう帰りますね」

「そつえば明日休みだっけ？」

「はい。明日はなにも予定ないですよ」

「なら明日１０？走るぞ」

「わかりました！」

俺もだいぶ精神力がついてきたな。なぜか雅さんとの鍛錬は楽しんだよな

――そして翌日――

「ようしんじゃあここからあその山までちょうど10?だからそこ走るか」

雅さんはかなりはりきっていた。なんか嫌な予感もするんだけど…

「俺よし!」

ダッ

ダッ

ダッ

ダッ

ダッ

「お前も大分慣れてきたな?走っても平然としてるじゃん」

「まだ1カ月もたっていないのに、俺も不思議なくらいですよ」

「よっしゃ!じゃあとばすか!ほらほら遅いと竹刀でたたくよ」

「ちょ…それは…かんべん…いてえ!」

――

「はあ…はあ…吐き気が…」

「ほれビニール袋」

「ここで吐いたら負けだと思ってる（ギリッ）」

「ふん！」

「ちょ！腹にパンチはや…オロロロロロ」

腹にパンチしてまで吐かせたいのかこの鬼畜は！！

「だすものはしっかり出さないとな」

「この距離って10？ですよね？」

「ああ」

「帰りは…」

「走る！」

「ええええええ！20？じゃないですか」

「気づくのが遅いわッ！」

逆ギレだと！？

「まあ、せっかく山まで来たんだ。ちょっとここで鍛錬しようじゃないか（ニヤニヤ）」

やはり走るの前の無駄なはりきりはこれだったんだ…
はあ…なんかとても過酷な鍛錬になりそうなんだけど
そして水を一気飲みして山を登ることにした

「ここはな、俺が中学生の時によく修行したもんだよ」

「じゃあ結構鍛錬するのには向いてるんですか？」

「ああ、しかもここは居合の練習をするのにぴったりだ、ここは静かだ」

「なるほど、じゃあ雅さん早く始めましょうよ」

「そうだな」

そつやって雅さんは俺に日本刀のレプリカを渡した

「それじゃあ始めるぞ」

「はい」

俺は目をつぶった

にしてもここ本当に静かだな

今までにない感覚だなこの感じ。

誰かが感じ取れる…これは雅さんの『気配』なのか？

「雅さん今移動しましたね」

「!？」

「俺の後ろにいるでしょ」

「お前をここにこさせて正解だったようだな」

「なんか今までにない感じです」

「これが気配を感じ取るって奴だ 居合を練習すると集中力も上がる、さらに集中力がますと人の気配までわかるんだ。ならこれはどうだ」

「いてえ！」

「さすがにそこまでは成長してないか」

「さすがに目をつぶって攻撃をかわせませんよー!!」

「そうだな…ならこれはどうかな」

「なにしてるんです？」

「（お前はなぜ俺の殺気を感じとれない!!こっとなったら…はあああああああああ!）」

「なにしてるんです？雅さん」

「なんでもない。明集中を続けてくれ」

（こいつ!?本当に俺が放った殺気がわからないのか!?結構真剣で殺気を放っているんだが）

「明!いまだ!!」

「ハッッ!!」

俺は思いっきり刀を振った

「なんだ…これは…」

「どうした？」

「なんか…空気を切った感じです」

そついうと雅さんは黙った。そしてこういった

「おめでとう明完成だ。鉄心さんもそう思うだろう？」

「気づいておったんか。うむ！明よ見事じゃった」

学園長いつのまに！？

そ、それより！！

「よっしゃああああああああ！！」

とうとうこの時がやってきたんだ！！もううれしい！嬉しすぎる！
！さいこうだあああああああああああああああああああああ
ああああ！！

「喜ぶのはまだ早いぞ明！お前はまだ移動を使った居合ができない
次はそれが課題だな」

「はい！でもなんで学園長が？」

「ここにもすごい殺気を感じたからの。もしかしたらと思ひ来て
みればの」

「まったくなんでこいつは殺気を感じることができないのかね」

「なぬ！？明お主さっきの殺気を感じることができなかったのか？」

「さっきの殺気だってwまったく鉄心さんもやるな」

「雅は黙っておれ！！」

「はい…」

「はい、気配は感じることもできても殺気を感じることができないんですよ」

「！？」

（馬鹿な！！そんなことがありえるはずがない…こやつ何者なんじゃ）

「それじゃあ居合もひと段落ついた所だし。帰るか明」

「はい！」

「じゃあ鉄心さんまだあとで」

「もうやめるんか。残念じゃのう」

「はあ…はあ…全身が棒になりそう」

「お前の場合棒じゃなくて全身が丸太になりそうだな」

「ほんとうに…ハア…いきも…ハア…走ってから…帰りは…ハア」

「それにしてもこんな早く居合が完成するとはな（ボソツ）」

「ん？」

「いや、なんでもない」

「じゃあこれで鍛錬も終了という事で」

「そうだな。背筋500腹筋500したら帰るか」

また…そんなきついことを…

「ほら早くしろ竹刀でたたかれないか？」

「やります！やります！」

「1」

「2」

「3」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「おつかれさま、じゃあ俺は鉄心さんの所で将棋でもしてくるかな」

「わかりました」

雅さんはそういつて川神院のほうへいったようだ

どうするかな昼から、そういえば秘密基地に漫画とかいろいろあったな。そこで時間を足すか

その前に着替えないと、汗びっしょりじゃないか！！

島津寮に戻り着替えをして秘密基地に行くと京と大和がいたこいつら実は付き合ってるんじゃないか？

「まったく大和と京は暇人だな」

「お前も暇人だからここにきたんだろ」
と大和

「てへ」

「すごい背中がゾクつとしたけど気のせいかな？」

「どついつ事だよ京！」

「すまん、俺もゾクってきた」

「大和まで（泣）」

ゴールデンウィーク（前）（前書き）

ゴールデンウィーク編さささです申し訳ない

ゴールデンウィーク（前）

さあ、やってまいりましたゴールデンウィーク！！
でもみんなの資金不足で名古屋までいけず…

「まあ、静岡もいいところだな」

「名古屋いきたかったぜ…ちくしょー！！」

キャンプは名古屋にいけず、悔しがっている所

「静岡より秋葉原のほうがよかったかもしれないね」

モロも静岡に来たことは後悔してるみたいだ…この先大丈夫か？
こうなったら俺がなんとかしなight！

「とりあえずぶらぶらしようよ、別にフリーダムでもいいじゃないか」

「そうだな！適当にぶらぶらしようじゃないか」

よし！大和も賛成！これで京も賛成だな！
あとは…

「俺も賛成だ！」

よし！リーダーが賛成すれば皆も賛成だな。よかった
そして俺たちはぶらぶら歩いて回ることに

さてと、皆がそうしている間にグーグル先生にでも頼って

「久能山東照宮いつてみたないか？こころ近そうだし」

っと思つたら大和が先に調べてくれてたみたい、さすが軍師大和

「よーし、じゃあそこいくか！！」

よし！！なんとか成功だこれで結構時間は持つてくれるだろう

「それより腹へったぞ、私達昼なにも食ってないじゃないか」

「アタシもお腹がすいたわ、どこかで食べようよ」

「俺様も腹がへったぜ、大和ーどこかいとこないかー？」

「そうだな、飯にするか」

- - - - -

「おい、大和」

「ん？なんだ？」

「静岡に来てまでマツクか」

「いいだろ、ここしかなかったんだし」

「確かに言われてみればそうだけど、まだ三日あるからね」

そして俺たちは観光地を見学したりしていた。
そうこうしているとモロがどこかのDQNに絡まれ

「おい、てめえなにガン付けてんだよ」

「え、いやあ僕はガンとはしていません」

「うるせえ！まあ、金くれたら許してやるよ」

なんか後ろに10人くらいいるな。こりゃ弱いな
モモ先輩！一言いっちゃってください！

「おい、私たちになんかようか？」

さすがモモ先輩だわ！

（明は最近では百代さんじゃなくてモモ先輩と呼んでいます）

「なんだあ、女がでしゃばってんじゃねよ！」

もう1人のDQNも参戦

「どうやら私を知らないようだな。久々に暴れられるようだな 私
を満足させるよ」

「はあ？なにいつてんだ・・・うわあああああああああ」

モモ先輩は一瞬で5人を片付けた
相変わらず攻撃が見えん

「お、おいこいつやべえぞ　に、逃げる！」

「おいワン子そっちに逃げたぞ」

「まかせて！」

そういうとワン子も蹴りやパンチで5人を抹殺した
ワン子って拳でも強かったんだ

モモ先輩も強いがワン子も十分強かった

「私たちの楽しい時間を潰すとは…覚悟はできるよね（ニッコッ）」

「でた姉さんの関節外し」

「おいまた目つぶってんのか…情けねエな」

「だってガクトグロすぎてみてられないよ」

なんでみんな平然とみられんだよ！！

「あはは、僕たちはもう慣れてるからね」

モロ…慣れてるお前らも怖いわ！！

DQNの悲鳴が全体に響き渡った

「よぉーし、じゃあきをとrinaおしていくか」

――――
「もうこんな時間だ、予約していた旅館あるからそこにいかないと
な」

さすが大和、段取りいいな

そして俺たちは旅館についた、

部屋は男子専用の部屋、女子専用の部屋という感じになっている

皆風呂に入り終えてそれぞれ部屋に戻りキャップはもう熟睡していた

「なんか修学旅行みたいだね」

そういえば俺修学旅行なんて体験したことなかったな…

そう思うと本当にこの世界に来てよかった

「修学旅行の醍醐味は枕投げだな」

ここでパジャマのモモ先輩登場 か、かわいい！

じゃなくて！！なんでモモ先輩たちきてんすか！！おとなし寝てて
ください！

つーかモモ先輩がまくら投げなんかしたら絶対蹴りや拳まではいっ
てくるでしょ！

修羅な予感しかないんですが！

「あ、俺ちよつと自販機いつてくるわ」

「明僕もいくよ」

「ま、まて俺様も」

「俺はトイレにでも行ってこようかな」

お前ら便乗してんじゃねーよ!!

「おい、男たち 逃げるとかいうなよ」

さすがモモ先輩俺たちの核心を容赦なくついてくる

「「「「「ひつ!」「」「」

「あはは、面白うだわ アタシも本気でいくわ」

「くだらない・・・でも大和も参加するなら（ぽっ」

なんか全員きてるし…

やばい!このままでは生還して帰れない!!

「お・・・おいお前らは違うだろ だいたい俺がいいだしたんだよ」

「お、お前らは違うだろ!俺はのどかわいたからよお」

「俺様も風呂入って喉がカラカラだ」

「僕もコーラがのみたいなあ、なんて」

「飲み物ならここにあるぞ、コーラもここに」

「「「!?!」「」「」

や、大和いつのまに！？

「や、大和てめえー（ボソッ）」

うんガクトも俺とおんなじ事おもってるみたい

キャップは幸せそうに眠ってるし…ちくしょーラッキーボーイが！

「俺はとい・・・」「大和はモモ先輩の舎弟だからモモ先輩のいう事にはさからえないよな！」「」

大和

「ふふふ、じゃあまくら投げかいしーーーー！」

――――
あまりにも修羅場なのでカット

女子たちはぞんぶんに暴れたあと女子の部屋に戻っていた

「うう・・・」

「せ、生還者はいるか・・・」

「俺様はなんとか・・・」

「僕も大丈夫・・・」

ゴールデンウィーク（後）（前書き）

ゴールデンウィーク編はggggすぎた！
後半が本編とかいうなよ？

ゴールデンウィーク（後）

「ああー、よくねた。よぉーし！今日もどっか行こうぜ皆」

キャンプは朝からハイテンションだった…それに比べて俺たちは

「キャンプ寝るの早すぎなんだよ」

「僕もさすがに昨日は疲れた…」

「モモ先輩の舎弟である大和を尊敬するわ…」

「ああ、心底後悔してるよ」

「あ、お前らずるいぞお！俺だけを残して昨日盛り上がるなんて」

「」「」「キャンプは早く寝すぎ！」「」「」

「さすがにモモ先輩達も寝て「お前ら今日はどこいく？」はええ…」

モモ先輩達はもうとっくに起きていたようだ
旅行ってこんなに疲れるんだ…

「俺様は今日はここでゆっくりしてるよ」

「俺も後少しねせてくれー」

「僕もまだ寝るよ」

「ということだから姉さんもまだ朝早いし寝てた方がいいよ」

「そうか、そんなに私からたたき起こされたいかさーて貴様らの関節を…」

「あ、俺様なんか目が覚めたな！」

「なんだか、眠気が覚めたよ　おかしいなーあははははーはあ…」

「僕もなんか目が覚めたみたい、今日はどこいこうか」

「寝る選択はないのか…」

俺たちはとつと準備して今日どこにいくのか決めていた

「はい！リーダー提案です」

「よおーし！明言ってみろ」

「今日は別々で行動したほうが良いと思いまあす！」

「お、俺様もそのほうがいいな」

「うん、俺も賛成だ」

「でも、せっかく皆で旅行に言ってるんだからアタシは皆と行きたいわ」

「俺も皆とがいいぞー！」

やっぱこの作戦はだめか、俺は1人で行動してどつかで寝ていたいんだがさすがにこのままだと体力が持たん…

「そうだぞお前たち別々なんて旅行した意味がないじゃないかなあガクト（ギロツ）」

「そうだね、俺様もやっぱりそっちのほうがいいかなーなんて」

「ああ、じゃあ俺もやっぱさっきの提案は却下で…」

逃げ場はないのかあああああああああああ！！

「明、俺たち終わったな（ボソツ）」

「おい舎弟」

「あ、いやなんでもないです」

モモ先輩はあれだ、なんかジャイアンだ
そうして僕たちは観光地めぐったりして無事、旅行も終わり最後の1日は1人でゆっくりしているところだった。

「ああゝ本当生き地獄を見たな…、二日目はなんとかモモ先輩が早く寝てくれてよかったよ…もし寝ていなかったら…ああゝ考えるだけでも鳥肌がとまらねえゝ 久々にPCでもするか」

俺はPCを楽しむことにした

今日は鉄心さんにちゃんと伝えないとな

「お前からくるなんて珍しいのお」

「はい、明の件なのですが」

「ふむ。なんじゃ？」

「15年前の事件覚えてますか？」

鉄心は少し顔を曇らせた、無理もない　あの事件は本当に悲劇だったんだ

「・・・ああ覚えておるよ　それと明がなんの関係があるのじゃ？」

「日本の四天王と言われた　【後藤　太一（たいち）】と【郷田　真帆（まほ）】いや【後藤　真帆】殺された事件・・・」

「明もの苗字も後藤じゃったの、まさか!？」

「そう、明はあの世界の四天王候補にはいる俺の姉貴の真帆と黛十一段の奴と同じくらい強かった剣士。後藤太一の息子なんですよ」

「しかしあいつら家族は『魔王とも呼ばれる奴』に殺されたと聞いたのじゃ・・・」

「はい、明もその時は衰弱していました」

「ではなぜ助かったのじゃ？」

「この手を見てください」

俺は左手てを見せた

「！？ なんじゃこの呪文が書かれたような手は、お前が世界で一番強いと恐れられているのはその左腕じゃったのに…」

「俺は神にこの手を明の命を引き換えに売ったんです」

「神？」

「はい、そうです。俺の左手は時空をゆがませることができた、その手を代償に明の命と安全な世界（次元）に移動してやるようにいっただんです。15年と半年」

「じゃああいつが殺気を感じないのも」

「たぶん、別の次元にいたからでしょう」

「そうじゃったのか・・・」

「それじゃ本題に入りますね」

「！？」

「悪魔と呼ばれた男は俺と鉄心さんが倒しましたよね」

「そうじゃったのう」

「その悪魔の息子がどこかで生きています」

オルズと雅（前書き）

side 雅

世界四天王の一人登場

オルズと雅

「なんじゃと!？」

鉄心さんはまた顔を曇らせた。まあ…無理もないか俺だつてそれを聞いたときは事実として受け入れられなかったのだ。

「はい、俺も最近耳にしたんですが、ロシアのほうで隠れてすんでいると」

「…あまりにも急な出来事で少し違う話をしてもいいかの…」

「ですよ、俺もそれ聞いたときは少し耳を疑いましたよ」

「すまない。ではお前が13年も失踪していたのにお前はよく世界の四天王を剥奪されなかったのはなぜじゃ？」

「いや、失踪はもともとマスコミのでっちあげで俺は四天王に言つてたんですよ」

「なるほど…それじゃあその事も」

「世界の四天王の一人『オルズベック・ステッセリ』（通称オルズ）から聞いたんですよ」

「それなら、世界の四天王がなんとかしてくれるじゃろ」

「それはできません」

「なぜじゃ!？」

「世界の四天王といえどもあいつらはあいつらで忙しいんです。今紛争や内戦が絶えないこの世界。なかなか止められません。しかもあの魔王と言われた奴も日本人ですからね。だから川神院にいる皆さんが必要なんです。明がいなときに攻めてこなかったのが不幸中の幸いって所です」

「しかしあいつは凡人並みじゃぞ、百代なんかには全然及ばない、ましては一子にも全くおよばない」

「鉄心さん、明は俺の姉貴の息子ですよ。強くないはずがない。しかもあいつの成長はすごいもしかしたら半年でかなり強くなれるかもしれない」

「しかしのう・・・」

「明は1学期が終わったら四天王の所で修行をさせにいくと思うてる、もうあんな悲劇は二度と見たくはないですからね・・・」

「承諾は得たのか？」

「今日話に行くつもりです」

「まったくお前は・・・、よからう!学校の件はわしにまかせろ悪魔と呼ばれた男の孫じゃ、どうせ厄介じゃろう」

「ありがとうございます、それでは」

「ふむ気負つけていくんじゃぞ」

じゃあまずはオルズの所からいくかな

あと三日もあるんだなんとかあいつら全員の承諾は得られるだろう
絶対に前のような悲劇だけは起こしたくない、俺が死んでもいいから
食い止めないと

side 鉄心

ふむ・・・これは百代に話しておいた方がいいのかのう

にしても明が真帆達の娘とは・・・打撃、剣士 両方のセンスはか
なりのものだろう
成長が楽しみじゃな

「15年前のできごとって...」

「聞いておったのかルー、お前も一度訪れたことがあるじゃろう」

「あの墓の事ですか・・・雅さんのお姉さんだったんですね」

「ルーよ、この話はここまでじゃあまり思い出したくない」

side out

ロシア

「オルズ大佐またロシアで紛争が多発しております」

「またか・・・俺の出番だないってくる」

「ハッ！気負つけて」

「（まったく、俺も年だから腰とか痛いんだよ）」

やっとなつたか、ん？紛争などどこにもおこってはおらんぞ

「よおオルズ、久しぶりだな」

その声は雅！

「雅か、やっとなつて帰ってきたんだな？明君は元気か？」

「ああ、今日は明について話がある」

「まあ、ここじゃなんだからほかの所で話そうじゃないか。それより紛争は雅が処理してくれたんだね」

「ああ、でも俺も年だ腰が痛くなつちまった」

「俺も最近腰痛でな年は取りたくないものだよ」

左腕を神に売っても実力は変わらないとは、そうとう努力してたな

「オルズ大佐、無事でなによりです。その方は誰ですか？」

「俺の知り合いだ」

「わかりました」

「あいかわらず大佐と呼ばれているのか」

「ああ、あんまりそう呼ばれたくないがな」

「明の話より聞きたいことがあったんだ、いいかい？」

「魔王の件だろ？ああ、本当さロシアのどこに住んでいるのかはわからないがいるのは確かだ。これが証拠だ」

「手紙か」

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

2010年 日本を滅ぼす

／／／／／／／／／／／／／／／／／／

「脅迫か・・・しかしどこにも魔王とは書いてないぞ」

「魔王はどうやって死んだんだっけ？」

「たしかあいつは海の底に沈んで消えたな・・・」

「そう、この手紙を水につけると」

「なっ！！」

「裏面に魔王と日本語で書かれていることがわかるだろ？」

「やはり本当だったのか」

「しかも情報によると2人いるらしい」

「双子だっていうのか!？」

「本当に厄介なことになりそうだ。われわれも手を貸してやりたいがこっちも紛争やデモで政治が混乱しつつもあるんだ。雅と鉄心がいるからいいだろう」

「さすがに俺と鉄心さんはもう無理だ、耐久戦にもなると一段と無理だ俺たちも年だからな。しかし日本にはまだすごいやつがいる」

「川神百代と隆かね？」

「ああ、そして明もそいつらに並べるようにしたいんだ。それで今日話にきた」

「ふむ。」

「オルズは俺より気が使えたな」

「ああ、俺は四天王の中では一番といってもいいぞ」

「明に気の使い方を教えてやってくれないか？」

「うむ。……いいだろう、雅には借りがあるからな」

「ありがとうオルズ!君は本当に最高だよ!!」

「ああ、明君の成長もみたいからね 期待してるよ」

「じゃあまたなオルズ、ところで『ハンス』はどこにいるのかい？」

「あいつは確かドイツにいるぞ」

「ドイツか、近いな」

「ああ、気負つけていけよ」

ハンスと雅（前書き）

side 雅

相変わらず戦闘シーンが下手くそです

ハンスと雅

ハンス・オリバー

あいつにはあんまりあいたくないんだけどな…
明日あいつの所にいこう

- - - - -

翌日

- - - - -

よし、ドイツにいるっていったな、でもドイツに戦争なんてあるのか？そもそもあいつドイツ出身じゃないだろ…そこも聞いとかなばなとりあえずどつか基地つばいところにいるだろ、適当に探すかでもそのまま言ったらマスコミにばれそうで困るんだよな、お面でもしていくか

「おお！あつたあつた！」

俺は中に入り近くの人に問いかけた

「すみません、ハンス・オリバーさんはいるでしょうか？」

「ハンス元帥はリユーベックの方におらっしゃるが、君はだれかね？」

「ああ、俺はハンスさんの知り合いで」

「そうでしたか、お氣をつけて」

「ありがとう」

リユーベックか、そこまで遠くないな

リユーベック

ここかぁ、結構豪勢なもんで
ちよつとあの人に聞いていくか

俺は赤髪で眼帯のした女の子に聞いてみた

「すまんがハンス・オリバーさんはいらっしゃるかね？」

「いますが、何のご用件で」

「ちよつとね、呼んでもらえますか？」

「はい、わかりました」

「君軍人さん？」

「そうですけど」

「そう……」

あんな若い女の子が軍人だなんて……しかも目には傷を負っているようだ

ハンスはなにやってんだ！！あんな若い女の子を戦争にだすなんて残酷すぎる！！

「あら、あなたは雅ちゃんのようなね」

「ああ、久しぶりだなハンスお前のお姉口調もあいかわらずのようだな」

赤紙の女の子が驚いた
しかたないか、失踪男が帰ってきたのだもの

「とりあえず、部屋まで案内してくれ」

「わかったわ、私も久々に雅ちゃんと顔を見れてうれしいわ」

「（ゾクツツ）！」

そしてハンスの部屋に

「おい、ハンス」

「なに？」

「あの赤紙の女の子を軍人から外したらどうだ、若すぎるし目を怪我してるじゃないか！かわいすぎる」

「なあゝにいつてんの雅ちゃん、あの子はマルギッテ・エーベルバツハといって軍人の家の娘よ、しかも目の眼帯は力を制御しているのよあの子は見た目以上に強いんだから」

「そうだったのか、やはり女を甘く見てはいけけないな　オカマは特に」

「ああ！なんかいったがゴルァ！」

「あ、なんでもないです」

本当この人は怒るとすんげえ怖いんだもんなあ…

「じゃあ本題に入ろうか」

「悪魔の事についてでしょ、オルズからきいたわ」

「それなら話が早い、明にお前のスピードを伝授させてくれないか？」

「そうね、久々に雅ちゃんのカッコいい姿がみたいわね」

「と、いうと」

「ここにいる軍人300人倒せたらいいわよ」

「おい！ハンス俺はもう年だぞ」

「じゃあなんで家族ほったらかしといて10年近くも旅にでたのかしらね？」

「「「うおおおおおおおおお」」「」」「」」

「ハッ！」

「「「「ぐわああああああああ」」「」」「」」

軍人たちはいつせいに舞い散った。明もこれくらい居合を上達させてくれなきゃな

「あら、あなた片腕使えなくなっても腕はおちてないじゃない」

「当たり前だろ、何年修行してきたと思っているんだ」

「二刀流、かまいたちじゃあああああ！」

「「「「「うわあああああああああ」」「」」「」」」」

side ハンス

「な、何事ですかあれは！いったあいつは何者なのですか！？」

「まあまあ、フランク中将久々の活躍だもの見せてあげようじゃない」

「なんてすごいおかただ・・・」

side out

「なんだこの仮面野郎、強すぎじゃねえか」

「ああ、この強さはハンス元師並みだ」

「その軍人共！気を抜くな！そんなに俺からやられたいか！」

「「うわあああああああああ！」」

「ふう、ざつと200人倒したところか 腰痛いんですけど…
ナッ！！？」

ものすごいスピードでレイピアが俺の顔を狙っていた

「なかなか、やるねえって・・・少女じゃないか！？ あのハンス
の野郎・・・こんな奴まで痛い目に合わせろというのか」

「安心して、あの子はフランク中将の娘よ、なかなか強いわ」

「よく今のを避けましたね、私の名はクリスティーア・ネフリード
リヒ 参る！」

「日本語がお上手なかで」

「はあああああああ」

「この年でこのスピードとわなかなかセンスがあるな」

「！！？」

「まだ遅い」

彼女を軽く気絶させた

「ふう、かわいい少女にあまり手を出したくないものだねって」

「チツ」

「おお、さっきの赤紙の女の子か」

マルギッテだっけ？その子は眼帯を外していたこいつはなかなかやるな

「雅さん、お相手できてうれしいです」

「それはなにより」

「はあっ！」

百代ちゃん並にはやいなこのトンファーが結構やっかいなんだが

「二刀流、斬撃波」

「！？」

「はい終了今度は明と遊んでやってくれたまえ」

「あと90人だな、本気でいかせてもらおうよ」

そうやって俺はお面を外した

「あら、雅ちゃんいいの？」

「ああ」

「「「「「「「「「「「あの人は！」」「」「」「」「」「」「」

「そう、世界四天王の一人雅でーっす」

side ハンス

「これはどういう事だねハンス元師！」

「まあまあフランク中将」

「・・・。」

（まさかこんなところで見れるとわ…）

side out

「二刀流、鬼斬！」

「「「「「うわああああああああ」「」「」「」

久々に暴れるのもいいものだな
いやあゝ実に楽しかった

「かつこよかったわ雅ちゃん」

「ありがとうそれじゃ明の件も」

「ええ！任せなさい！」

「よかった、じゃあこれから頼むわ」

「次はジャックの所に行くのね、彼はアメリカのニューヨークにいると思うわ」

「ああ、ありがとう」

「ついでに泊まっていきなさい」

「ああ、ハンスと別の部屋で泊まることにするよ」

「あら、一緒の部屋でもいいのよ？」

「お断りします！」

「冗談わよ冗談」

「はあ…今日は疲れた…」

ジャックと雅そして家族（前書き）

今年最後だから見とけよ〜見とけよ〜

ジャックと雅そして家族

「そういえばハンス、お前なんでドイツなんかにいるんだよ、お前
タイ出身だろ」

「あそこはもともと平和なのよ、あそこはちょっと私には住みにく
いからドイツに来てみたの。ここは本当にいいところよ」

「つたくお前は」

「雅ちゃんも日本じゃなくドイツで私と一緒にすまない？」

「絶対嫌です」

「恥ずかしがっちゃってー。それより今からジャックの所に会いに
行くの？」

「ああ、そうだが」

「なら私が連れて行ってあげるわ。フランク中将雅ちゃんをアメリ
カのニューヨークまで連れてってあげなさい」

「かしこまりました」

「おお！いいのか。すまないな」

「いいのよこれくらい。雅ちゃんもいずれ私のものになるんだから」

「（ゾクツツ）」

「それでは雅さんいきましょう」

「よし、行きますか」

この人がフランク中将か、なかなか信頼感のある人だ

- - - - -
- - -

「どうでしたか娘の実力は」

「ああ、あの金髪の女の子でしたっけ、あの歳であのスピードは私もなかなか驚きましたよ、見た限り高1つて所ですよ。それより本当日本語上手で」

「ええ、クリスは日本が大好きなもので来年日本の川神学園に転校させようと思っているんです」

「川神院はなかなか厄介な人が多いですよ、特に野獣とか」

「そうだったときは軍を率いて攻めにきます」

「あはははっ、なかなかいいジョークで」

「本当です!!」

フランク中将はなかなか娘さん思いで…

「ま、まあその時は明にさせないように言うておきますよ」

「明？」

「はい、俺の弟子なんですよ」

「ほお、雅さんの弟子とは…強そうですね」

「いや、あいつは全然ですよ。多分娘さんでも5分あれば倒せるでしょう」

そういうとフランク中將は笑みを浮かべ

「来年が楽しみです」

- - -
アメリカ

- - -
- - -
- - -
- - -
- - -

「では私はこれで」

「フランク中將も氣負つけて」

そこにはでかい建物があった、あいつもなかなか豪勢な所にいるなあゝ

「がははははは、雅久しぶりだな」

お、その汚い笑い方は

「よおジャック久しぶりだな」

「明の件だろ？ああ、俺に任せな」

「さすがジャック、お前はなにも条件をつけずにするなんて男だな」

「いいや、条件は付ける」

「お、おいもう戦いはいいぞ」

「なあゝゝに簡単な事だ、お前はまだ家族に会ってないだろ」

「俺はあいつらに合わないだけだ合わせる顔なんてない」

「ぜははは、そういう事いうなって。もしお前の嫁と娘がここにきていたらどうするよ？」

「な、おいちよな「お父さん！」」

「がはははは、それじゃあ家族と裕福な時間を頼む」

「なっおいジャック…」

「やっと帰ってきたのね…おかえりあなた、真理も大分成長したよ」

「ああ、ただいま母さん、真理」

「お父さん、私寂しかったんだから…」

「すまないな、真理」

「それよりあなたこの服についている唇の後は何？」

「まさかお父さん浮気とか」

「なっちがうまさか、そんなことはって!？」

（絶対ハンスだ、俺は違う!）

「あなた、どうなるかわかってるんでしょね」

「違う!誤解!これはハンスが・・・ああああああああああああああああああああああああああ!」

「ロシアの紛争を止めてドイツのリューベックの軍を300人撃退
そして嫁にやられる。これは傑作じゃの明」

「笑わないでくださいよ。説得するのに何時間かかったと思っ
てるんですか…ハンスの奴め」

「まあ明の件はすんだからいいじゃないか」

「そうですね、あとは明しだいなんですがね…」

こうしてそれぞれのゴールデンウィークは終わった

S組対F組（前書き）

今年最初だからみとけよう
みとけよう

S組対F組

「ぐ…この野郎…」

「おい、お前そのていどかよ。それで英雄様を打ち取るってのか」

「うるせえ！このアバズレが」

「ああ？誰がアバズレだ、私の名は忍足あずみだ覚えときな」

なにをしてるのかって？

それは1週間前までさかのぼります

――
――
――

「来週1-Fと1-Sの勝負をするネ、ルールは武器はどれでも使用可、団体戦だネ、皆絶対この戦いは勝つんだヨ！」

「「「「「「よっしゃあああああああああ！」「」「」「」」」」」」

「とつとつこの時がやってきたぜ！」

「ああ！、1-Sにぎゃふんと言わせてやらなきゃな！」

はい、この通り来週大戦を行うそうです、でも俺の実力を試せるぢやんすかも！

居合も完成に近づいてきてるしなんかわくわくするなあ〜

「うちには俺様やワン子や京がいるからな、勝てるだろ！」

ガクトはもうハイテンションの様子で

「そうだね、アタシ1人で1-Sをぶっ飛ばしてやるわ！」

「でも向こうの戦力もなかなかだぞ」

「S組ねえ〜」

たしか不死川心とか忍足あずみが強かったな

あ、あと柳原小雪も強かったんだっけこっちは2人

・
・
・
・
。

勝ちめ無くない？

いや、俺も多少は強くなってると思うけどさすがに…

うん、多分すぐやられると思うし

しかも京って接近戦できないよな、どうすんだこれ

「大丈夫、こっちには源さんがいるから」

大和はよく源さんにネタをふるなあ〜好きなのか？

「あ？こっちは寝てんだぞ今度じゃまするとぶっ殺すぞ　まあ、俺も一応頑張ってるよ」

源さんはツンデレの鑑だな

「まあ、そこらへんの作戦は軍師大和に任せたぞ！」

「ああ、任せとけ！頭脳じゃ俺が一番だ」

――
――
――

「そういうわけなんですよ雅さん」

「いいじゃないか、思う存分暴れて来いよ！」

「はい！」

「さあ居合の練習だ」

「はいッ！」

――
そして大戦の日
――

「大和作戦はできてるか？」

「ああ、もちろんだ」

「とりあえず京は柳原小雪を足止めしてくれ」

「わかった」

「そしてワン子是不死川を頼む」

「わかったわ！」

「そして明」

「おう！雑魚はませろ！」

「お前は総大将を打ち取ってくれ、多分総大将は英雄だ」

「ああ、総大将か任せろ！って…え？」

「お前ならいける！信じてるぞ」

「おう、明総大将打ち取ってこいよ！俺様も期待してるぜ」

皆が俺をここまで期待してくれるなんて、なんか俺本当に幸せ者だよな、前の世界では俺なんてゴミのようにみられていたのに、なのに今じゃ…絶対期待に応えてみせるさ！

「おう！期待しとけよ皆！」

「ようし、じゃあ風間ファミリー、出陣だあ！」

キャンプがそついうと皆は駆け出して行った

今年の中で最も記憶に残る戦いがここに始まった

明の力（前書き）

あけましておめでと〜いいます！
言い忘れてましたorz

明の力

この対戦はどこかの山を使用して、本格的に行っている試合だ本当川神院は戦いとかにはかなり力をいれるんだからなあ

もちろん2年生も3年生も見ているようだ、そしてその中で俺が結構注目されているというわけだ、本当あの柔道部の野郎今度は締めながら関節してやるぞ

「うてえ えええええええええええ！」

S組の男子の声が聞こえると弓兵がものすごい勢いで矢を放っていた

「うわあ ああああ！」

「大丈夫？ 明　ここはアタシに任せて早く総大将の所に！」

なんとか矢はワン子が薙刀で振りおとしていたみたいだ、すごすぎるんだけど…

「ああ！ありがとうワン子！」

俺は大和の指示通りに進んでいった

「!？」

ものすごいけりが飛んできた
間一髪避けられたが…こいつは!?

「うえゝい、ここは通さないよぉ」

「そうだがここは俺たちが通さない、しかし少女は通す!」

電波ちゃんとハゲロリだな、2人もくるなんて…
でもこちらには

「それはどうかな、京!今だ!」

「なっ!?!」

矢が準の胸にクリーンヒット!痛そう…

「京ここは任せたぞ!」

「(コクリ」

ああゝ京まじ可愛いんだけど いかん!いかん!まだ俺は2次元に
慣れていないのか!?

俺は必死に走ったあそこに茂みが!

「そこだな!」

「明までっ!?!畏だ!!!」

「え？」

俺が気づいたときには遅かったようだ、どうやら囲まれたようだ
人数は20人といったところか

「大和、少し通話できなくなるがいいか？」

「ああ、明任せた」

囲まれた先には英雄とがいた
こいつらを倒せばなんとか総大将を倒せるな

「フハハハ！残念だったな庶民よこれでお前も終わりだ、いけえ！」

20人一斉にかかってくる、これは困ったさすがに対処できんぞ…
とりあえず逃げて敵を1人1人潰そう！

俺は思いつきり刀を振りながらを逃げた

「おい、てめえ逃げるとかシャバい事するんじゃないやねーよな？」

しまった！あずみがいたんだ、これはもう作戦とかいう問題じゃな
さそうだな
全力でいくか

「「うおおおおおおおおおおお」」

「こんな奴ら日々の練習に比べたら」

1人1人の動きが遅い、しかしこの人数では…

「うぐっ…」

「だめだ、1人倒すごとに3つのダメージを受ける俺ここまで弱かったのか

…武士娘たちはこんな奴ら普通に飛ばすのに…」

「うおおおおおおおおお！」

3人、4人、そして10人
あと10人だ

「ほう、なかなかやるではないか」

もうこうなったらやるしかない
俺は目をつぶって脱力した…

「負けを認めるのか庶民にはなかない心構えだ」

「」「」「うおおおおおおお」「」「」

10人全員でくる、今だ！

その場が一齐に静まり返った

そしてその瞬間10人も人が次々と倒れていった

「はあ…はあ…」

俺の体はボロボロだよ…でもここからが面白いんだよな

「なあっ！庶民がここまで強いとは…」

「誰が庶民だ俺は立派な師匠がいるんだ、覚えとけ」

明VSあずみ（前書き）

あと1話で20話ですね

明VSあずみ

side あずみ

こいつ、10人を一瞬で倒しやがった、気はそこまで感じられない
が根性はあるみたいだな
しかしこいつはもうボロボロだ

side out

「英雄様は危ないのでさがっててくださいー」

「うむ、あずみに任せたぞ」

英雄はそういつて去っていった

「さて、じゃあ始めるとするか」

そういつた瞬間思いつきりあずみの拳が俺の顔面にクリーンヒット
する

「ぐ…この野郎…」

「おい、お前そのていどかよ。それで英雄様を打ち取るうってのか」

「うるせえ！このアバズレが」

「ああ？誰がアバズレだ、私の名は忍足あずみだ覚えときな」

そういうと今度は小太刀を持っていた
まずい！これを食らったら完全にやられる！

「うおわっ」

「おお、よく避けたじゃねーか、でもな」

「こっちもお見通しだ！」

「ほう…なかなかやるじゃねーか」

こいつの攻撃は本当に早い、防御ですら精一杯だというのに
これいじょう対策があるのか？

「おらよまだまだ」

あずみの攻撃が次々と繰り出される

「ぐっ」

本当川神学園には化け物しかないな、なんだよ攻撃するだけスピ
ードが上がるって
下がるの間違いじゃないのかよ…

「はぁ…はぁ…」

「もうばててんのか？まだこっちは遊び足りないんだよ」

「うおおおおおお」

「威勢がいいな、でも」

「ガハッ！」

「瞬でみぞおち！？」

「でぶはスピードが遅いんだよなあ」

「がはっ、がはっ ごほっ」

「今度はこっちの番だ」

「！？」

「だめだ全然勝てる気がしない、本当化け物だ
こうなったらもう煩惱で叩くしかねえ！
考えちゃだめだ」

「うおおおおおおおお」

「なにっ！？」

「攻めろ、攻めろ 攻めが最大の防御だ
とにかく暇なく攻め続けないと」

「ぐっ！？」

「ひるんだ、今だ！！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおお
」

頼むからあたってくれ

「ツツツ!？」

あずみは中にうかんだ
どうだ!? 決まったか?

「ってて、てめえよくもやりやがったな」

だめだやっぱ俺負けたわ。もう気力すら残ってねわ

「忍足流 五連衝撃破!!」

目の前には何が起きているのかわからなかった、にしてもこれレプリカだよな?

なんで俺の肌から血が出るの? チートなの? 課金してるの?

「ふう、てこずらせやがって」

「.....」

/ / / / / / / / / / / / / / / /

「お前ならいける、頼んだぞ!」

「俺様も期待してるぜ」

「大丈夫? 明 ここはアタシに任せて早く総大将の所に!」

「（コクリ）」

「よおーし！お前らいくぞおー！」

/ / / / / / / / / / / / / / / /

ああ…なにしてんだろうな俺

俺はなんでみんなが必死に戦っているのに1人でお昼寝しているんだろうな

皆の期待に応えなきゃいけないだろ、しかもまだ負けと決まったわけじゃない

最後の切り札がある。

「さ…い…g…の勝負…だ」

「ああ？お前まだ生きてたのかよ」

「最後の…勝負…と…行こうじゃないか」

真の居合（前書き）

誤字・脱字があったら申し訳ないです

【追記】 みんなお気に入り登録ありがとう（；
；）

俺もう頑張るよ！！

真の居合

「最後の…勝負…と…行こうじゃないか」

「お前死んじまうぞ」

「このくらいは何度も体験してきたよ、人は意外と頑丈だ」

「またあの時の技か、それはもうお見通しだ」

「……。」

「そんな技はこつちも対策があるんだよ」

そういつてあずみは小太刀を俺にめがけて投げてきた
いけるか？

「はあああああああああ！！」

「なあっ！？」

（こいつ！一瞬でアタイの所まで来て…そんな…！？）

俺は思いつきりあずみに居合を放った
完成した、真の居合が

「デブは意外と速いことを分かってくれたかな」

「くっ…」

あずみは倒れた

「やった……倒したぞ、化け物を……やったああああああああああああああああああ！」

まさかこんなに威力があるなんて、なんなんだよ必殺技ってこんな
に使えるのかよ！
最高だなこの野郎！

俺はさっそく大和に連絡した

「あずみ、撃破 俺はもうねるぞ——————」

そして俺は電話を切り 寝た

side 鉄心

「おおーやってるねー」

「雅、来ておったのか」

「そりゃ弟子のためし時ですからね」

「さすがお前の姉さんの息子じゃ、S組でかなり強いあずみを打ち
取るとは……」

そして20人撃破」

「ほう、決め技はなんです？」

「居合じゃ、明の居合はほぼ完成じゃったよ」

そうやってわしは雅に戦っていたビデオを見せた

「おお、鉄心さん気がきくじゃないですか」

「どうじゃ？」

「50%つてところかな」

「なっ！」

「確かにあのスピードはよかった。でも次そのあずみちゃんに明が居合

を放ったとしたら…見切られていたね」

「なるほど」

「それにまだあいつは技を見切ることができない。全然だ」

「まあ、居合は最後の最後に使う技ですからね、とりあえず居合はいいかな」

「お前もなかなか厳しいのう」

「そりゃ俺の弟子なんですからね。」

「お前なら居合でどのくらい倒せる？」

「100人が限界かなードイツの時もそうだったですし」

「さすがじゃな」

「鉄心さんだつて現役のころ100人なんて軽く吹っ飛ばしたじゃないですか」

「ふおつふおつ、お前ほどではないわ」

side out

side 大和

「大和なんだつて？」

「明があずみを撃破したつてよ」

そういつた瞬間キャップやガクト、モロが驚いていたもちろん俺も驚いている

あいつがまさかあんなに強いとはな…

そして

「「「「よつしゃあああああああああ！」「」」」

俺たちの喜びが広がった

「よし！ガクト、キャップ 今度は俺たちの出番だ 総大将を打ち取るぞ！」

「おう、この俺の風のようなスピードで打ち取ってやるぜ」

「俺様の力で粉碎するにきまつてんだろキャップ」

「なんだとお!？」

「そんなことは後からにしろー!」

「大和、僕はなにをしたらいいのかな？」

「モロは俺と一緒にキャップ達を先導しよう」

「うん、わかった」

絶対この戦い勝ってみせるぞ!

決着（前書き）

1人1人のキャラを出すのはとても難しいって事を学びました
本当に難しい・・・

決着

Side 英雄

「あずみはどうした？」

「そ、それが…」

「ま、まさかあの庶民があずみを打ち取ったというのか？」

「信じられないけどあずみとそいつが倒れていました」

「なあっ！？馬鹿な！」

あの庶民め、只者ではないな…たしか誰かの弟子とかいっておったな

Side out

Side 大和

「これでF組の勝ちがもらってぜー」

「油断するなガクトそれに京やワン子もまだ決着はついていないんだ」

「大丈夫だ、俺の風のような速さで総大将など打ち取ってやる」

「おい、聞いてたかキャップ…」

まあ、にしても一番厄介なあずみが倒れてよかったよ
さすが明というところか

「な、なんだこれどうしたらこうなんだよ……」

「どうしたガクト？」

「あずみは無傷で倒れているのに明は血だらけで倒れているぞ……」

「なあっ！？」

なんつう奴だよあいつ……

「そ、それより総大将を」

「ああ、キャップに行かせてる俺様も急がないと」

side out

side 英雄

「やはり翔一殿がきたか」

「あたり前だあー俺はリーダー（総大将）だからな」

「そうか ならば総大将である英雄がaあいてしよう！」

「おう！決着をつけてやる！」

side out

「うん…」

「お、起きたか明」

「あれ？戦いは？痛ッ！」

そうだ俺はアバ…じゃなくてあずみと戦って勝って…
どうしたんだっけ？

とりあえず勝ったのか？負けたのか？どっちなんだ？
てか俺なんで試合ごときにこんなに包帯巻いてんだろ…
なんか自分だけ恥ずかしいような

「と、とりあえず勝ったの？」

「おう！この総大将が打ち取ったぜ！」

「きゃ…キャップ…てめえ！いいところとりやがってー！俺は
こんなにボロボロになったのにおいしいところ無し…ちくしょー
！！」

「いや、多分お前が一番目立っていたぞ」

「どゆこと大和？」

「そうだな、揚羽さんも橘さんもお前に注目していたぞ是非戦ってみたいって私もまた戦いたいぞ」

「ああゝお姉さまアタシが先なのよ」

「私も少しは戦ってみたいかな」

おい…そんな化け物と3人も来たら俺体もたないから俺一応まだ素人より少し上って感じだから普通に俺コンクリートにひびが入るくらいの技くらったら死ぬから・・・

でもここはここの世界なんだよな、もしかしたらってそんなこと考える俺も怖いな・・・

「そ、そうだったんですか でも四天王に注目されるなんて」

――
――
――

「お疲れさん、まったくお前は目立ちすぎなんだよ」

「見てたんですか雅さん」

「そりやお前の実力見たいしな、でもまだ50%だな」

「ありがとございます！ってえ？まだ半分！」

「あとはスピード、気力、力、技術だなそれはまたあとでじっくり鍛えればいい

この技はもうこれ以上は教えなくてもいい」

「じゃあ次の技を！」

「そうだな、次からは刀を2本持て」

「え！？」

「二刀流の練習だ、俺も二刀流が得意だからな」

「わ、わかりました！」

――――
翌日
――――

「昨日はお疲れ様ネ、にしても明お前は本当凄いヨ！やっぱりあ・・
・じゃなくて

すごい鍛錬頑張ったネ！」

「あはは、ありがとうございます」

一方女の子の会話では

「本当明君凄いよね、もしかしたらモモ先輩まで倒しちゃうんじゃ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6474z/>

真剣でこの世界にやってきた

2012年1月5日19時56分発行